

朝鮮中の抗日と大日本帝国の瓦解
―フランシス・ザビエー、日本古代国家論―
(十・完)

北島平一郎

目次

第一部	フランシス・ザビエーとカソリシズムの日本席捲	四五
一、	イグナチウス・ロヨラ (Ignatius de Loyola: Inigo Lopez de Ricarde, 1491-1556) 貧困、純潔、献身 イエズス会の綱領 「精神の練成」	四八
二、	イエズス会の組織 僧業会員 一般聖大会議 イエズス会初期の活動	五〇 五一 五四 五五 五七
三、	フランシス・ザビエー (Francisco de Yasu y Xaviers, 1506-1552) ザビエーの生いたち ポルトガル東方帝国 東印度	五九 六〇 六一 六四 六五
四、	F・ザビエーと日本 鹿児島上陸 F・ザビエーの日本に於ける足跡 F・ザビエーの中国渡航計画と死	六五 六九 七二

五、F・ザビエーの信仰と日本伝道

F・ザビエーの評価

F・ザビエー、教義と布教

F・ザビエー、教義の内容

六、F・ザビエーとイエズス会、日本布教の成功

布教の方式

布教成功の原因

ポロシモを愛せよ

キリスト教祭祀とキリシタン

第二部 大和朝廷と女王国（邪馬台国）

一、革命的クーデター大化改新

国家権力と共産主義

共産主義国家と「家族、私有財産、国家の起源」

共産主義国家大化の改新

蘇我氏の篡奪

国家Ⅱ起源、機能、制度

二、日本古代国家論

疑書魏志倭人伝

聖書と古事記

記紀のヒロイン 天照皇大神

古事記の九州女帝国と邪馬台国幾内説の戯言

神武東征と出雲国征服

和、倭国、大和朝廷

記紀と魏志倭人伝の総括

三、内陸国家と海洋国家

七四
七四
七九
八〇
九二
九二
九五
九六
一〇一
一〇六
一〇六
一〇八
一一二
一一四
一一四
一一八
一二四
一二八
一二八
一二八
一三一
一三二
一三二
一三五
一三六
一三九
一四〇

第一部 フランシス・ザビエーとカソリシズムの日本席捲

一、イグナチウス・ロヨラ (Ignatius de Loyola: Inigo Lopez de Ricarde, 1491-1556)

十字軍がエルサレムをめぐってイスラムと激烈な死闘を展開すること六世紀間（一一世紀末から）に及んだ歴史は、前号（大阪経済法科大学法学論集（以下法学論集）第四六号、朝鮮中の抗日と大日本帝国の瓦解（八）——駁逆の明治維新——）にのべたのでここには繰り返さないが、結局最后、カソリック教全組織をあげての十字軍戦争はその敗北に終り、彼等が踏みとどまったロードス島、サイプレス、ベニス等をそれぞれ一五二二年、一四八九年、一五七一年にイスラムの為に失ってやんだ。

しかし、カソリックの熱情はこれで消え去るべきものではなく、カソリック教徒はスペイン、ポルトガルに代表されて、世界に進出する。これはアレキサンダー六世 (Alexander VI, 1492-1503) の大号令の下、異教の徒をカソリックに改宗させ、カソリシズムを知らず、その暗黒の迷いに沈淪する彼等の魂を救済することを目指す一大壮舉であつた（二四九三年）（北島平一郎著作集第三卷所収、「近代外交史三つの視点への試論、——十字軍から地理的世界発見——」参照）。

これは第二十字軍とも呼ばれるべきものであるが、スペイン、ポルトガルは聖書を頭上にアフリカ、東南アジア、インド、北米、中米、南米、カナダ等へ進出した。しかし、これと共に今一つのカソリシズム復興の動きが、欧州で力強く起つた。それが、ここでとりあげるイグナチウス・ロヨラ、フランシス・ザビエー (Francis Xavier) ピエール・

ルファブル (Pierre Lefèvre) 、ディエゴ・ライネッツ (Diego Laynez) 、シモン・ロドリゲス (Simon Rodriguez) 、ニコラス・ボダデラ (Nicholas Bodadilla) 、フランシス・ボルジア (Francis Borgia) 、マニエール・ダ・ノブレガ (Manuel da Nobrega) によるイエス・キリスト教団の設立であった。これは反リフォーメーションとも呼ばれるカソリシズム復興の運動を欧州から全世界に広げる今一つのカテゴリであった。これはルッター以降の宗教改革の鯨波に対抗して、カソリシズムの信仰と法王の權威と力を人々の魂に再びよみがえらそうとするものであった。

ロヨラはスペインの出でバスク地方 (Guipúzcoa) ロヨラ家の居城で生れた。当然の運命として彼は軍人を志したが、一五二一年の五月二〇日、仏軍との抗戦中パンプローナの墓地で敵の砲弾を受け右脚骨折、左脚被傷という逆運に見舞はれた。彼はここで軍人としての希望をたたれ、脚の重傷も再度手術を受けるなどして種々の機能が著しく低下した。彼は軍人中勇敢なそれとして女性との艶聞も聞かれたというが、ここで瞑想と宗教帰依の生活に転換する。彼の軍人としての勇氣と不屈の精神、絶えまない努力が新しい生活にも彼を導いて新境地を開く。彼はキリストの伝記や聖人のそれらに読みふけり自ら黙想と帰依の難行苦行にいどんで精神的回帰を目指す。

一五二二年二月、ロヨラは家族と訣別してスペイン北部の巡礼地モレトセラに移住した。そこでまず彼は自分の帯剣と短剣を俗世の野心放棄のあかしとして処女マリア (Virgin Mary) の像にたてかけ、三日間不眠不休のざん悔を行った。そして三月二五日衣服を麻袋のそれにかえ一夜を祈りに費した。彼はバルセロナに近いマンセラに行き、そこですさまじい苦行の生活に入った。即ち一五二二年三月二五日から一五二三年二月半ばまで彼は麻の衣服に身を包み、乞食として生き、充分な飲食もとらず身を鞭打ち、髪もとのえず、櫛けずらず、瓜も切らずに毎日ミサに出席して一日七時間の祈りを神に捧げた。この苦行に耐えることにも彼の軍人魂がいきっていた。

ここで彼は苦行の中で悟りに入ることが出来た。この悟りというのはもとより難解で、人、夫々個々の心的昂揚であり文字を以て解釈することは不可能である。東洋的宗教的精神躍動の事実で、キリスト教等に於ては、悟りに理解の語 (apprehension, comprehension, awakening) をあて、それに続く魂の安定とよろこびを以て表現される。東西共に魂を苦しめ、浄化する行動としては同様であろうと考えられるが、その発現はそれを導く宗教の異なるところに従つてもとより同様ではなからう。

ロヨラの場合、彼はこの精神的苦闘とよろこび、内なる光に意義づけられる悟りを得るのであるが、一日、彼はカルドナ河の岸边に坐してこの精神の躍動を覚え、彼の理解 (understanding) のまなこがひらかれる。そこで彼は信仰上の、精神上の多くの事物、諸々の事象を何らのビジョンをみることなく理解し、知り、心のはてしなき喜びと安心に全身の雀躍にみまはれるのであった。ロヨラはこうして所謂悟りの眼をひらかれた。彼はここで「精神の練成」 (Spiritual Exercise) という覺書をつくり、これに書き加えがされ、彼の、そして後のイエスイット教団の憲法にまで高められる。教団の存続する限りこの基本綱領はかはることがなかった。それは人々に、特にイエスイット教徒に隠とんの精神的活動をとくものであった。活性的、動的靈活動のシステムをふくむ精神的武装の書。その手引き書という性格をこの冊子もついていたのである。そしてこれが一五四〇年に至り法王ポール三世 (Paul III: 1534-1549) によつてよみされ、これにローマ法王の承認が与えられる。

ロヨラは一五二三年三月から巡礼の旅に出、バルセロナ、ローマ、ベニス、サイプラスを経て九月四日ジェルサレムに到り、そこから、ベサニ、オリブ山、ベツレヘム、ヨルダン河を回つて一〇月三日再びパレスティンからサイプラス、ベニスを経てバルセロナに帰りついた。しかし實際は、ジェルサレムに於て一つの計画、即ち教団の設立を

行おうとしたのであったが、該地で、理解を得られず、彼の目ざしたラテン教会でも靈廟の管理職に彼のとくところが聴かれさえされないことなどがあつて再びバルセロナに戻つたのであった。そしてそこでロヨラは、勉学の道を志す。軍人の教養から出て一般的な学、宗教学等の修得にはげむ決心をつける。そして一般人が修学をおへる年齢で彼は勉学の道にいそむこととなった。彼の勉学もまたすさまじいものがあつたが、まず二年間はバルセロナで修学にはげみ、それからアルカラに移つた。この間彼を慕つて集まる人々が現れた。彼等は人々の眼にたつ衣装を着て集団として行動したので当時やかましかつた異端派とせられ、逮捕された。疑いは程なく晴れたが、これを契機に彼はサラマンカに移つた。しかし彼に対しては修業をおえて僧職につく迄は宗教活動を禁止するという事になり、あれやこれやで彼はスペインを離れてパリに移住した。ここで彼は一五三五年まで生活するが、その間乞食でくらしをたてた。一五二八年、二九年にはフランダースへ赴いたが、それはスペインの商人からの喜捨によつた。一五三〇年には英国へもいつている。パリでロヨラは別の弟子達の一団を得た。しかしその活動がまたもや当局の忌避にふれ、彼は当局に辨解これつとめねばならなかつた。これが彼を自肅すが、パリの大学で念願の修士号を獲得して勉学の一応の目的を達した。そしてこの間彼と彼の行動を世界的とし、ローマ・カソリックの聖人に列せられる契機が生れた。それが先述のフランシス・ザビエー以下のジェスイット教会を構成する人々の集まりであつた。教会のオリジナルメンバーは先述の人々と共に七人であつた。

貧困、純潔、献身

この人々が集まつたのは、一五三四年八月一日、モンマルトル近傍であり、これがジェスイット教会の設立に導

かれるが、ここでロヨラのたてた誓い、と人々が感動を以て賛同したのが、貧困、純潔、献身のそれであった。ローマ教会の腐敗墮落は年久しくキリストの教えはどこ吹く風で僧侶は性にふけり、マネーゲームにうつつを抜かし、法王も蓄財にこれはげむという風潮を身をなげうって矯正しようという息吹きであった。ローマ未だ亡びず、キリストの教えはあまねきものであるという再生を果すロヨラと七人の同志の熱き誓いであった。

ロヨラはついでスペイン、ポローニヤ、ベニスに移り、ベニスでさきの同志達と合流したが、彼等の願いであるヂエルサレム巡礼の旅は、このときは、ベニスとトルコ帝国の開戦の為実行不可能となった。この間ロヨラと同志達が一五三七年六月二四日を以て聖職に任命されたのはこの地に於てであった。彼等の喜びは察するにあまりある。彼等は一八ヶ月間牧師職の経験を積み、専ら祈とうの中に日夜をすごした。ロヨラはこの間未だミサ (Mass) をとねえることはなかったが、生涯の運命的幻影をみた。それはある日、彼の前に十字架を背にしたキリストとその傍らに時を越えて存在する父 (父 (神) と子 (キリスト) と聖霊の三位一体) が現れたのであった。キリストはまず父にいった。「身はあなたが、この男を下僕^{しもべ}とされることを願う」と。そしてキリストはロヨラに向い、「我が意^{こころ}はなんじが我々に仕えることである」、と言ったのであった。ロヨラの感激はまた察するにあまりある。彼はこうして一五三八年クリスマスの日、ローマの聖マリア大聖堂で彼の最初のミサを首唱した。ここにキリストとローマに献身の犠牲を以て仕える一僧職が自信を以て生れたのであった。

ロヨラはキリストとローマ法王に仕える種々の事業に手を染める。学校の設立、大学の基礎づくり (the Gregorian University)、ドイツ人の為の僧職予備校 (the Germanicum)、更に女性 (fallen women) の救済機関、改宗ジュウのホーム等。しかし勿論彼の名を歴史上不朽のものとするのはローマ・イエズス会 (Societas Jesu, S.J.) の設立である。これ

によつてロヨラとその同志はカソリシズムの浄化と再生、その拡大發展をめざして欧州を中心とし、世界に足跡をひろげる。その信条は、神の栄光と魂の救済をめざすところ、命令により世界のいづちに於ても生活することを忌避しない、というものであつた。

イエズス会の綱領

デスイット教会の名がこのイエズス会から出るが、それが設立されるに至る経緯は前述の如くで、これが動機となるのは、十字軍の敗退によるカソリシズムの衰亡に起因することも前にふれた如くである。ロヨラが聖職に転じるのは一五二二年五月となるが、ときあたかもルッター以下の宗教改革の火の手が欧州に吹きあれるときで、ドイツ、フランスを中心とする農民戦争が猖獗し、十字軍の敗退と相まってまさにカソリシズム有史以来の最大の危機が形成されていた。ロヨラは六人の同志と共に自らすすんでこのカソリシズムの苦難をもとに転回しようとして逆まく激浪の中にとびこんだ、と云える。

イエズス会は、ロヨラ以后連綿として祖法相つぎ、二〇世紀の世にも活動したのである（一度、一八一四年にクレメント一四世によつて解散さされている）が、その会の組織綱領はロヨラの定めたもので彼はこれに最大の苦心を払っていた。こうした風潮と危機の中につくられた綱領は先述の「精神の練成」とこれとならぶイエズス会の根本的基本法とである。デスイット教会の設立を一五四〇年とすると、とき、ドイツ農民戦争等が反動の中に終結し、欧州に新しい時代がはじまろうとしていた。また十字軍の完敗によつて極東との貿易をたれた欧州が海から世界再結合にのり出してスペイン、ポルトガルついでオランダが中近東、アフリカ、インド、東南アジア、また、カナダ、北

米、中米、南米に進出しはじめて聖書を頭上にかざし乍ら植民地帝国の建設にはげみはじめていた。

このときにイエズス会の設立があり、これを法王ポール三世がよみしてその下にイエズイット教会が世界に進出して大いにキリスト教を弘布しようというのであるから、法王庁、イエズス会共にカソリシズム再生と拡大の風を望んで大いによろこび、興奮していた。その中でイエズス会の綱領が作成されるのである。こうして一五五六年にはイエズイット教会は世界に一二管区を組織しイエズイットの数も千名を数えるに至っている。（今日ミレニアムのイエズス会員は三万名を数えるという）。

「精神の練成」

イグナチウス・ロヨラはもとよりイエズス会の初代総長に選ばれて終身その地位にとどまるが、まず会の綱領の完成につくす。本書は文字通り人間の魂の練成、成熟をめざすものである。自己の心の働きを自らみつめ、苦しめ、種々の反省、自省、黙想、自己批判を行う。精神の苦行、苦闘である。そしてその葛藤の果てにゆるぎなき決意（安心立命の悟り）に到達する、というものである。ロヨラはこの精神の働きに最初からとりくんでいる。そして一五三九年には会衆の基礎を確立することを営む「組織の形成」(Formula instituti)をかき、これが翌年法王の承認を受けることになったのであった。この書の具体的手段は次の如く教えられる。①乱れた感情や、世間の俗秩序から魂の清純化をめざす。②生活の選択をなすに当ってはその前に神の意志のいづこにあるかをみいだすことにとめる。③イエスキリストの導きによって創造主へ心や意志をささげる、と。この心の練成は四週間の禁欲苦行にわかれたるが、これが「会」の教えと実行の基礎であった。

「会」の根本義は神への讃美、尊崇、奉仕にあるが、「精神の練成」と並んで課せられものに「良心の宗教的究明」(General Examen)がある。これは個人の神への魂入を通じそのたすけの下にその救いと完熟をめざすものであるが、ただそれだけの個人的なものにとどまらず、これを隣人に施すことが求められる。即ち隣人の魂の救い、と完熟をはからねばならぬことである。これが、カソリシズム復興と弘布の大号令となるものであった。このもつ意義は大きくここからキリスト教の宣布が究極政治的意味をもつて世界的にくりひろげられる。宗教が単なる個人的、こころと
いう問題ではなく、これを以て隣人の魂を救うという大命題が、「会」と宗教の名に於て会衆のみならず全キリスト
者のこころのしほり、となるのであった。これがフランス・ザビエーに代表されてそれ以后日本に伝わり、種々の
闘争と葛藤をくりひろげる。この実行がキリスト者のこころのしほりである限り、めざすは日本全カソリシズム化で
あった。かくして「島原の乱」を頂点とする日本政権とカソリシズムの激闘がつづく。このとき、大正、昭和に至り、
徳川幕府を中心とする所謂日本政権のキリシタン弾圧をその限りとりあげ、これを克明詳細に記述して日本政権の野
蛮性、残酷性を強調する一団の人々があらはれた。これが明治政権(大正、昭和も含む)とその実行を礼讃し、徳川
幕府とその時代を否定する役割をになった。このことは否定すべくも無い。

ロヨラはこの活動を魂の浄化の第一義とし、それまでの諸々の会組織から明確に区別される外的、内的自己犠牲に
もとづく良心の究明と定義したのであった。

ロヨラはまた「会」の為の生活信条を処方している。会衆はまず喜捨によって生きる。これが根本義。貧困のすす
めは厳格な共同所有(Common ownership)の要請にこたえるものとなる、会の支配の嚴重さは、会の上長の命にたよ
ることであり、外部の嚴酷な諸々の規律をまもることとは別儀である。これらの熱慮が示された。従順は奴隸のそれ

ではなく、子の親に対するそれである。それは明確に教会の宗規的機構、憲法（Constitution）の規範内に制限され、そしてまた良心と道徳律にも制約される。しかしここでロヨラの強調するところは人間の意志と判断であり、その超越的側面である。人はその人間的限界が明白なものであるから、その限り、人間の内部的最高精神を神聖化する為、その徳を強調しなければならないと主張したのであった。

ロヨラは一方革命児として宗教的生活の方則を種々新しくしている。その主たるものは次の如くであった。①種々の難解な中世的宗教的実行、即ち嚴酷な中世的難行苦行に関する規則、また制服と習慣、聖歌隊の儀式的コーラス等の廃止。これは、会衆のすみやかな移動性とそのときどきの周囲へのスムーズな適応性確保の為必要である。②以前の諸々の会組織にみられた如き平行的、デモクラテック統治形態の放棄、これは君主政体的ハイエラキーの確立の為で、その中ではメンバーの声が聞こえ無い。勿論その頂点にはロヨラがたつ。③法王庁によって会衆が自発的に従うことが出来るとした場合、それが個人と会の為によいと判断される限り複雑な中世的恭儉な誓いの表明を単純化し得る、等。

さてイエズス会は既に法王承認を受ける以前から会衆の各地への派遣を行っていた。それは法王の命令という形式で、オリジナル・メンバーが取り扱いのむづかしい危険な任務につくことであった。イグナチウスはローマにとどまったが、各指令は彼から出、そして会衆は彼等のロヨラに対する報告が義務づけられていた。それが追々拡大される。一五四一年にロヨラはそれまでの彼の発想を整理して「根元の法」とする作業に力をそそぐ権能を与えられる。これはもとより「精神の練成」「良心の宗教的究明」等に基くそれであった。この「根元の法」はその后種々ねり直される。そして最終の完成は一五五六年とされ、二年后、一五五八年、「第一回イエズス会一般大会議」が召集され

て、そこでこれが上程され、承認を受けるのであった。これが全く文字通りイエズス会の根元的聖典となる。その道程は次の如くである。ロヨラは六年間、実行可能な組織の法則 (Formula Instituti) を種々あれこれと実験的にもいあげ、練り上げる。それが一五五一年に「根元の法」の第一草案となった。ロヨラはまたそれを練り直し、改訂を加え、翌年これを全組織に弘布する。しかしこれはまだ法的強制力をもたない。そして尚彼の生涯最後の四年間（一五五二―五六）をかけてその最終の改訂を行ったのであった。イグナチウスの細心さと慎重、あくなき努力がここでも発揮された。

二、イエズス会の組織

僧業会員

イエズス会は「根元の法」に従ってイグナチウスに組織されるが、その成法はロヨラの心身の鍛練を受けてきびしいものであった。「根元の法」はイエズス会そのものといえた。その分身であった。それは尚、法王によって公認せられた「会」の特権の文書をつけ加えていた。即ちその特権の列挙、一般聖堂大会議の立法権、一般的規則等であった。「会」には三階級をあげていた。下から神学修練 (scholastic)、司教補 (coadjutors)、キリスト者 (professed) であった。そのまた下に候補者 (aspirants)、即ち望みをいだく者が組入れられる。これは目的達成までに様々の試練を課される。しかし才能と適応性と努力を欠いては、キリスト者に到達し一般聖堂大会議の組員となることは出来なかった。キリスト者への道は遠かった。

候補者はまず志想堅固が求められ、更に徳性と思慮深さが要求される。まず短い假採用期間がもうけられ、「会」の精神になじみ、神の召命 (vocation) がためされる。これを無事すぎると修練士 (noviceship) として二年間の刻苦精勵が待ちうける。候補者の最初の難関である。三〇日間の「精神の練成」が加えられ、卑職 (いやしい) につけられる。これをつとめねばならない。これに合格すれば、はじめて「貧困、純潔、献身」の誓いをささげることが出来るのであった。ここで選ばれた人達のみが、「神学修練」にすすむ。さて次は九年間という才月の鍛練が候補者の身心に課せられる。カリキュラムは、文学、科学、哲学、神学であった。これは、二、三年間の教職期間を含んでいた。教育はまた嚴重な監督のもとに遂行された。こうしてようやく僧職に任命される。しかしまだ「キリスト者」ではない。この僧職は更に一年間の「第三修練期」(tertianship)に入る。これは隱遁的禁欲と難行苦行の生活の月日であった。そしてここではじめて彼等のうち神の召命を受け「会」の組織と活動に適應する人格であると認められた者が「キリスト者」にすすみ、「会」の公認の組成員となるのであった。果しなき難行苦行であった。ここではじめて彼等は宗教的誓いと、従順のそれを法王にささげる。彼等は「会」の内外に於て、如何なる惡しき望みにも權威の誘惑にもまどわされることはない。これも彼等の誓いの一つとなる。

この階級にすすめなかつた僧職は「正式の精神的司教補」に列せられる。しかし高き職位にのぼることは無く、「会」の全活動に夫々参加することとなる。彼等は通常「教区牧師 (rector)」に選任される。しかしその過程で特にすぐれた才能と適応性を發揮した者は認められて「キリスト者」の地位にのぼせられることもあった。この他「会」は俗界司教補をもつ。これは、世俗の同朋で、平修士とされる。その任務は協会の中で家族的な血縁的な関係や問題を処理することであつた。

一般聖大会議 (General Congregation)

一般聖大会議はイエズス会の最高の立法、行政機関であつた。その最重要の任務は「総長」(General)の代がはりに次期総長を選任することであつた。総長はその会を主宰するがそれはその大会議の制規に従つてであつた。その組織は、地方区管長(司教 Provincial)をもち、これには各地方管区会議から選ばれた夫々二名の聖代議士がつく。

総長は終身であり、「根源の法」に従うが、「会」に対しては完全な權威と力(独裁)をふるう。彼を補佐する人々があり、これが「補助」(assistants)である。彼等は地理的に区劃せられた地域を夫々代表する。「会」は管区にわかれ、それは地方管区長によつて統轄される。彼は各地方管区の行政の責に任じ、各任務に、必要な人々をつけて行政を行う。しかし大学や修道院の自治には干渉することはなかつた。地方管区長や地方長官は総長の任命であつた。総長は、修道院、大学、そして各地方管区から公式の報告をあつめてときどきの現状を把握し、「会」を運営した。

かくカソリシズムに於ける十字軍の敗退、つづいて起つた宗教改革、欧州農民戦争の鯨波の中にそのローマ以来の命脈をたたれんとしたキリスト教は、漸くイグナチウス・ロヨラのイエズス会の創設をみて、水脈未だたれず、の感を深くする。イグナチウスの「会」は、これらの背景の下に生成したのであるからカソリシズムの腐敗墮落を匡正する事を第一義とした。イグナチウス自身の禁欲と苦行、乞食の生活から「会」のおきては、みた如く当時では破天荒なまでのきびしさとなつた。これがカソリシズムの復活再生につながるのか、海外には十字軍の敗退と共に一五世紀末、一六世紀はじめにカソリシズムの下に世界を再び結合する為、世界地理的發見に名を籍りた世界植民地化が、法王の裁定の下に聖書を頭上にかかげて着々進んでいた。果してイエズス会の実行は、この中にあつて如何なる方向

にむかうのがここで次の問題とならねばならなかった。

イエズス会初期の活動

イエズス会初期の活動は、当然その創設からイグナチウス在世中のそれとなるが、カソリシズムを浸透拡大する為に、人々の教化につとめ、宗教改革の却火の中でカソリシズムを擁護する企てとなる。その一つはセミナリオ、学校等の建設での人々の教化であり、その二つはこれを海外にまで広げて同じ目的を異教の地に世界的に広めようとするものであった。第二の企図は、イグナチウスの故郷スペインやポルトガルの聖書を頭上にかかげた海外植民地獲得運動とつろくするものである。これらの活動はもとより宗教改革派、非カソリシズム、そしてあまつさえ同宗派の嫉視とたたかい乍らの活動となった。

カレッジの最初の設立は、一五四六年、スペイン・ガンデシアに於てであった。ここではカソリシズム、文学、哲学、神学等が教授された。一五五一年にはローマ・カレッジが設立され、これがカレッジ中のモデルとされる。そして重要な事は、翌年、同じローマにドイツ・カレッジが開設されたことであつた。これは正面きつてルッター派との対決を求め、宗教改革と農民戦争の本拠に攻撃を加えんとするもので、イエズス会正念場の教化活動を意味した。具体的目標はルッター派に影響されたドイツ僧職にかわるドイツ人中心の若い僧職者を育てようというもので、まさに火花散るたたかいであつた。教育活動では先述の司教補が活躍するが、その他に説教師、伝道師 (catechist) (僧職ではないが、キリスト教を研究し、祈とう書に習熟して教化を行う) 等がづくり出された。後者は少年少女の堅信礼を受けようとするものを対象としたが、病者、囚人、街頭婦、そして兵士達をも教化の対象とした。ここにイエズス会

の地下草^{チゲツサ}の人々に対する義務観をみ得る。こうした態度が異端審問所等を設けなかった日本でカソリシズムが広く受け入れられた大きな理由の一つであった。とまれ日本でイエズス会士が渡来当初から各地で盛んにセミナリヨの開設に力を入れたのはここに由来していた。

ここでイエズス会の海外活動を見るとそれは、スペイン、ポルトガル、イタリアを欧州の根拠地として東南アジア、インド、日本、中南米、そしてエチオピア等にわたり、スペイン、ポルトガルが植民地開拓活動をくりひろげた地域のすべてに及んでいる。

このとき愈々フランシス・ザビエーの登場となるが、日本に於て異状なまでに知名の聖人として喧伝されるこの人物はキリスト教伝導の日本に於ける先達として矢張り徳川政権のキリスト教弾圧にかこつけ、その野蛮、非文明を徹底的にあばき明治植民地政権（大正、昭和のそれを含む）を聖明、文化の代表としてあがめさそうという意図から作爲された人格であったことは疑いない。

即ちフランシス・ザビエーは一五四一年にリスボンから船出してカソリシズム海外伝播の業務に従事するが、彼はインドにわたり、南西インドに地域全般のカソリシズム伝導の拠点を決める。そしてここできくも恐ろしい異端審問所を設けて異端派をそれにつけ、処刑している。彼にとってはインド人とは理性に従わぬ「未開無知」なる異教徒にすぎなかったといわれるのである。これについては一五七五年だけでも二人のプロテスタントと一七名のユダヤ人が「神を殺す者」として断罪され、薪の山の上で生きたまま火炙りにされたという。この年はすでにイグナチウス・ロヨラなく、フランシス・ザビエーも一五五二年に亡じているのであるが、インドに異端審問所の設置を一五四六年にジョアン三世（João III 1521-1557）に進言して実現させたのはフランシス・ザビエーであった。（フランシスコ・ハビ

エルの功罪、小岸昭、京都大学教授、毎日新聞、一九九七年五月一〇日記事）。

この事實は、スペイン、ポルトガルの植民地開拓運動と重ねあはせてみるとその信憑性は高く、またコルテス（Hernando Cortes）のメキシコ征服、ピサロ（Francisco pizarro）のペルー征服の際にとられた聖書を頭上にかかげた詐欺と残虐と最もよくつろくするのである。ちなみにキリスト教に於ては火刑は通常の処刑方法で、例えばエリザベス一世当時の火刑の実行とかドイツ農民戦争中の種々の火刑とか、フス（Huss）、ジャンダークをまつまでもなくそこには火刑の例は枚挙にいとまない。十字軍と戦ったイスラムにはその風習はなかった如くで、日本では、八百屋お七と石川五右エ門（釜茹で）の二例が有名な位である。

さてザビエーは一五四六年迄にモルッカ諸島にいたり、一五四九年に愈々日本に参着する。ここで記述は拙稿の目的に従ってザビエーの日本布教とそのカソリシズム伝導の理念と実際、一向一揆を中心とする仏教とのかかはりあいを見せることとなる。

この頃の他の「会衆」の海外伝導は当時困難な海洋通航の中でコンゴ（一五四七）、モロッコ（一五四八）、ブラジル（一五四九）、エチオピア（一五五七）等に及んでいた。イエズス会士が如何にカソリシズム復興に身を賭し、情熱をかたむけて奔走していたかがよく理解される。イグナチウス・ロヨラはその死の時期一〇〇の宗教ハウスに一〇〇〇名の会衆をもち、これを一二の管区に組織していた事が知られている。

三、フランシス・ザビエー（Francisco de Yasu y Xaviers, 1506-1552）

ザビエーの生いたち

説

論

フランス・ザビエーはスペイン・ナバラ州のバスク言語地帯、ザビエー城に三人の男児の末弟として一五〇六年に誕生した。幼時から僧職に身をささげる運命とされ、頭はオワン型の修道士の様なかり方をされていた。成人して先にふれた如き活躍をするので、「印度地方の聖徒」という別名を頂戴している。イグナチウス・ロヨラとの出会いやイエズイット教会入団の事情は先に述べた如くであるが、このパリ大学には一五二五年に入学を許可されて、聖バルブ・カレッジ (College de Ste. Barbe) で生活する様になった。そこでは彼はポルトガル王の庇護を受けたが、ここにはスペインやポルトガルから来た留学生が多くいた。同じイエズイット教会のオリジナルメンバーとなるファール (Peter Favre from Savoy) と友人となったのもここに於てであった。イグナチウス・ロヨラが加わったのは一五二八年のことで、一五三〇年にはザビエーとファールは同大学哲学科のM・Aを授けられた。その年の一〇月からザビエーは神学の修練に入るが、同時にドルマン・ボベー・カレッジ (College de Dornans Beauvais) で学生達にアリストテレスを講じることとなった。ここでイグナチウスの宗教活動への回帰が起り、彼はザビエーにこれを熱心に説いてその賛同をとりつける。ファールと共に彼等は六年の後にイエズイット教会の設立を果すのであるが、この三人が「会」のオリジナル・メンバーとして一五三四年八月一日、純潔と貧困、献身とデエルサレムへの巡礼という誓いをたてるのであった。イグナチウスはこの間のザビエーを評して今迄に試みたパン種の製造でこれが最もかたくなかったそれだ、と言った。これをしかしもし英語で表現すると jumpiest dough となつて jump には愚鈍といった意味もある。イグナチウスの表現はバスク語であつてザビエーの包括的かたさといふことであつたのであろうか。そして同年九月ザビエーはイグナチウスの「精神の練成」執筆に参加した。尚ザビエーは一五三六年末までパリで彼の修

業を継続するのであった。

一五三七年一月同志もふえた彼等は愈々エルサレム巡礼の旅にのぼるべく、ベニスに集結した。そしてそこで船待ちの間、ベニスの各病院で病人の看護に従事した。同年春彼等はローマに赴き法王ポール三世 (Pope Paul III) はその巡礼行の企てをいたくよみして、彼等に僧職の認可を授けた。イグナチウスとザビエーは六月二十四日にこれを受けた。この行は先述の戦争の為に不可となり、ザビエーはその間イグナチウスの命令でポローニヤにいたり街頭や教会でイエズス会の理想と実践を説教した。この間同じく各地にちつていた同志達は、一五三八年四月、ローマに再集結し、そこで説教、教育、貧者や、不幸な人々、病人への奉仕に従事した。

ポルトガル東方帝国

このときイエズイット教会には一つの転機が起った。それは聖バール・カレッジの教区牧師であつた人が、ポルトガルのジョアン三世に「会」衆の東方派遣、ポルトガル東方帝国の活躍をたすけさせることを進言したことであつた。法王はこの進言を嘉納し、一五四〇年三月にイグナチウスにその命を下した。これがフランシス・ザビエーがポルトガルのゴア、そして印度、そして日本にやつてくる契機となつた。欧州の一隅で起つた発議が途端に日本に及び、日本史の一頁を色あざやかに染め上ることとなつたのであつた。何人がこのことあるを知ろう。このとき「会」にはロドリゲスとボバデラの二人だけが残つていた。そしてイグナチウスはこの兩名にこの使命を授けた。しかし運命はまさに奇であつた。後者は病にたおれ、ピンチ・ヒッターとしてザビエーがその役目をうめることとなつた。

彼は一五四〇年三月一六日、ポルトガルを目指してロヨラの下を出発する。このときザビエーはイエズイット教会

が、法王庁から宗教法上の宗団認可を受けたら、その総裁には、イグナチウス・ロヨラを推すという不在信任投票を託した。しかしまたここで一件が起った。それは兩名がリスボンにいたり、そこで東方への船便を待つ間、説教を行い、善行を施したとき、ジョアン三世はいたくロドリゲスの言動にうたれ、彼を王の手許に残す様に熱望し、それを実したのであった。言はば、ここでもザビエーはその意味の選にもれたのであった。

フランシス・ザビエー、こうして一五四一年四月七日、彼の名を不朽とし身命をはたす大航海大冒険に神の名の下に乗りだした。この日は、奇しくも彼、三五回目の誕生日であった。同行はポルトガル・ゴア総督マルチン・アフォンソ・デ・ソアウサ (Martin Afonso de Sousa) であった。当時の航海の難渋は今日の眼からは想像を絶する。彼等はモザンビークでモンズーン待ちの為、六ヶ月を空費することとなる。

漸く彼等がポルトガル印度帝国の首府ゴアに到着したのは一五四二年五月六日であった。ザビエーはまず同地の司教フランシスコ派のジョアン・デ・アルブケルケ (Franciscan Juan de Albuquerque) に法王等の信任状を捧呈して忠誠を誓った。その中にはジョアン三世による法王教書 (brief) のザビエーを法王使節とするというのも含まれていた。しかしこの東インド諸島 (the East Indies、インド、旧インドシナ、マレーシア諸島を含む) の首府ゴアをはじめ各地にはフランシスコ派、ドミニコ派 (Dominicans)、オーガスタ派 (Augustinians) 等の僧職が既に多く入りこみ盛んに布教活動に従事していて新来のザビエーには出る幕はなかった。彼はそこで自らをポルトガル人とその召使い達の共働者と位置づけ、病院で起居し、病人の看護をし、また囚人のもとを訪れたりしたが、常に小さい鈴をふって街頭で子供達、労働者、奴隷等を集めて神の教えをといた。まさに令外の働きに従事していた。

このときザビエーはデ・サウサからコルモリン岬の北東に位置する漁場でバラバ現地人の間に福音の伝導を行うこ

とをすすめられた。ここは欧州から雲煙万里をへだてた東インド諸島中の寒村で、矢張りポルトガル政府の管轄下に収められていたが、回教徒との接点で、その意味の難所であり、従来言葉の点で福音の伝導が困難なところであった。普通に俗っぽく考えれば、普通の平均的人間でこういった場所への着任を求められればその人の人生はここで終る。特定の上長の選にもあずからず、特段の任務も与へられず、任地でも一人前の仕事が出来ないということになれば、それはもてあましものとなり、何かの避村、避地へ追い払はれてその人のキャリアはそれ以上を望めない、ということである。

しかしザビエーは違った。彼はここでの困難な任務に耐え、充二分の働きをし、そして後、遂には日本という当時の文明強大国を発見して、そこにカソリシズム伝播の大もとを打ちたて世界をアツといはしたのである。日本に於てはカソリシズムはまさに彼を以て起源とする（日本東北地方その他にネストリ派（Nestorianism）、四三一年、カソリシズムから異端を宣言された。中国では景教、の痕跡がみられるといわれる）。平成の日本は残念乍ら、国際的に何らのイニシアチブもなく、影響もない、と一喝されるあわれな存在であるが、一時は世界五大国の一に数えられ、明治以来その点では、英独仏三国にも比肩する植民地帝国として大いにその意味の威を張り、その日本の発展と共に、そこへのカソリシズム伝播の大先達としてのザビエーの名声も世界に冠たるものとなったのである。日本では彼の名は、歴史辞典は申すに及ばず、中小外国語辞典にも掲載されている。勿論中々あり得ないことである。その点ザビエーは非凡の人といふべきなのであろうか。（彼の東インドに於ける異端審問所等の開設努力についてはその記事をのせている書物は発見するのに困難である）。ザビエーが、しかし、貧困、純潔、献身の生涯を送ったことは疑いない。その点はロヨラと同断であらう。財を求めることもなく、英和両国の東印度会社の様な事跡もなく、色をあさったこと

もない。その点、宗教の創始者達と相似た境涯ではなかったろうか。しかし興味あるのは、宗教の創始者は積極的であり、戰闘的であることである。これなければ宗教の確立や伝播はない。これは日本のことであるが、全く隱遁的生涯を送った西行、芭蕉、良寛、蓮月尼といった人の境涯とくらぶればこれら宗教創始者の境涯がロヨラ、ザビエーを含めてその相違点に於てよく理解出来る如くである。

ザビエーはここで二年間を送り（一五四二—四四）、その間パラバン神学生のタミール語通訳のたすけをかりて布教した。彼は既洗礼者の助けをかりて幼児洗礼を施し、多衆改宗を導いた。また病者の看護に従事し、村落間の紛争を調停し、外敵とたたかいまたその後の講和に盡力した。一五四四年の最後の日には彼は、トラバンコアのマクア漁民一万人に多衆洗礼を施し、彼等が後に信仰の堅信を受ける準備をした。

東印度

ザビエーの粉骨挺身の布教は、追々人を納得さすものとなる。一五四五年一旦ゴアに戻った彼はコーチンに赴き、そこでポルトガル商人が多数入りこんで活躍していたインドネシアにカソリシズムの布教の必要を痛感し、印度に初のカソリシズムをもたらしたとされる聖トマス (St. Thomas) の靈廟をマドラス郊外にたずねた。東インド諸島行の決意であつた。かくしてザビエーは一五四五年九月、マラッカに到着。ポルトガル商人達にまじつて現地マライ人達に布教を行う活躍をはじめた。一五四六年一月にモルツカ諸島中のアムボイナに移った。ここは丁字（香料）の産地として有名であつた。該地でザビエーは南インドの漁村で行つたと同様の病者に仕え、人々に教えをとき、洗礼を施した。これは、近隣諸島のテルナーテ、ハルマヘラ、モロタイ島等に及んだ。この仕事は一五四七年の後半六ヶ月間の

ことであつた。彼はポルトガル植民者や商人達と共にジョアン三世のポルトガル東インド帝国確立の為に我が身をさ
いのみながら渾身の働きをつづけたのであつた。

マラッカへ帰つたザビエーはここで生涯の転機に逢着する。日本人アンジロー（Anjiro）との出会いであつた。彼は
五年前にはじめて日本を訪れたポルトガル貿易商人達にともなはれてマラッカに来ていた。彼はその意味で同じ商人
仲間であつたのであろうか。（一説ヤジロー、殺人を犯して逃れていたとか、海賊の仲間に入っていたとかいわれ、諸
説があるが謎の人物とされている）。

四、F・ザビエーと日本

鹿兒島上陸

ザビエーはアンジローを紹介され、そこに知性と利発の人をみた。彼が海外で接した人々とは一味違つた人格をア
ンジローに於て見出したのである。この人物は既に深くカソリシズムに帰依している。この人の国ヘカソリシズムの
伝導に赴くのは、これこそが神の導きであり、そのよみされるところである。これが運命である。これこそが神の知
見である。ザビエーは新しい発見に心おどるのを覺えた。

こうしてアンジローとの問答の中にザビエーは日本伝導の神命の具体化をはかる。彼はまず尋ねる。日本人はキリ
スト教に如何に反応し、これを受け入れることが出来るか、それはまた如何にして可能か。アンジローはこれに真摯
にこたえる。これについては、彼等日本人はまず多くを質問するであらう。そしてそれに私が如何に答えるか、そし

てまた私がどれ程の知識をそれにつき有しているかをたしかめる。これが重要である。尚彼等は私がのべ且信じていることがらに如何に私が順応して生きているかをみる。これらの事柄を果した後、少くとも半年間は、時間が必要である。つまりその間、私ののべた事について私が非難を受ける様な言動が一切なかったことが判明したあかつき、彼等はキリスト教に近づく。そして王、貴人、その他分別に富む人々がクリスチャンとなるであろう。日本人は全く理性的な人々と言える、と。ザビエーはこれらの言葉に勇躍し、一層、神のお召を強く感じて日本行の準備をすすめるのであった。まず、アンジローと二人の他の日本人を彼等の洗礼と尚一層の教えの為にゴアに送り、彼自身もゴアの仕事を整理する為に一旦コーチンの漁村を経てそこに戻った。ゴアでの出来事は、アジア人の為に僧職につく訓練を行うセミナーヨであった。聖ポール・カレッジ (College of St Paul) がジエスイットの手に入ろうとしていたことであつた。かくしてザビエーが日本行の第一歩を踏みだしたのは、一五四九年四月一五日である。彼が鹿兒島につくのは、それからまだ四ヶ月を必要とする。当時航海の難渋は、今日の眼からしては文字通り、隔世の感を感じる。ザビエーに扈從する者、二人のジエスイット、三人の洗礼を受けた日本人であつた。五月三十一日、マラッカ着、六月二四日、危険な航海に乗り出した。彼等が命を託するものは一隻の中国ジャンクにすぎなかつた。

荒波を越え心細い航海の後ザビエー一行は待望の日本についた。そこはアンジローの故郷鹿兒島であつた。時に一五四九年八月一五日。日本にとつての運命の日。奇しくも同じ日時がそこに示されている(旧暦。新暦は七月三日)。彼は鹿兒島藩主島津貴久に親しく迎えられ、アンジローが通訳その他の世話をした。ザビエーは直ちに藩主の許可のもとに街頭に説教、教育、洗礼の仕事に従事した。鹿兒島に滞在したその年、キリスト教への改宗者が一〇〇名をかぞえた、という。しかし早くも仏教との摩擦が起つて寺院での論争等があつた。九州では彼は平戸を訪れたが、京都

への遊説を果す為、九州から中国、京都の旅へ上った。途中山口で大内義隆の屋敷に滞在して京都に至り、滋賀との国境いをなす比叡山に仏教の一方の雄延暦寺に推参して大いにカミを論じんとはかった。ザビエールの意気まさに天をつく憾があった。叡山湖岸の日枝神地に至って、このことを成就しようとしたが、結局そこで山上への登山をはばまれて終った。（これらについては尚后にふれる）。

ザビエールが九州を出発したときの記録に次の如きがある。それは、一つの駕籠行列であつた。これは貴人をのせ、かごをかつぐ人はトロツト（はやあし）で進む。ザビエールと二人の若い同朋とがこれについていた。各々貴人の荷物を背負つていた。このとき三人は共にはだしであつたが、それは、彼等が靴をはきつぶしてしまつたからであつた（代替物がみつけれなかつた為で、この一事は実に東西事物の相違を活写して一つの雰囲氣を出している）。行列は一日二回各々九哩（約三十六里）をゆき、夜は供の行列の休息の為に宿をとつた。この行はザビエール達にとっては大変苦勞なものであつた。ザビエールは京都から一旦山口に戻り、豊后の大友義鑑ヨシケンの招きをうけて府内へ赴いた。そして一五五年九月ザビエールは再びマラッカに航すべく日本を離れた。これが彼が日本ですごした全日程、行程となつた。

ザビエールが日本という文明の大国にはじめてキリスト教を伝えた功績は彼の名を不朽とした。キリスト教は日本でも急速にひろまる。それは、一つには主として九州の大名が、ポルトガル貿易に利を見出してポルトガル商人達が帰依している宗教と宣教師を優遇したことからもあつた（貿易の利を得られなくなつたら途端に宣教師を追ひ出した大名もある）。

右の原因をキリスト教日本弘布の一つとみることができが。

一、第二にはザビエールが上陸した日本は丁度戦国乱離の真只中であつたといつてよく、彼が目ざした京都は応仁

の乱（一四六七—一四七七）以後半世紀で、昔日の威風と繁栄をいまだ回復していなかった。疫病、飢饉といった天災も激しく、戦乱、一揆等が頻発していた。いま戦乱をあげると川中島の合戦、毛利元就の陶晴賢征伐、一揆には加賀、越前、三河、伊勢・長島等の一向一揆、京都の土一揆（酒屋、土倉を連日襲う）、等が荒れ狂っていた。こうした天変や人災等で庶民は極端に苦しめられ、これが新しい宗教の伝来とカミのすくい思想となつてキリスト教拡散の一方の土壤となつた。

二、欧州の宗教改革や農民一揆がキリスト教カソリシズムの腐敗墮落から結果した如く日本でも仏教の腐敗墮落が新しい宗教に庶民の眼を向かせる一原因を構成した。そもそも日本では仏教は早くから大土地所有者（後に説明）として強大な権力、勢力を誇り、僧兵を養つてこれをまもると共に自己の勢威拡張に腐心するという有様で、カソリシズムが免罪符を街々に鈴をならして売り歩くといった可愛らしいまた宗教精神的腐敗墮落と様変わり、それは勿論そうともいえるとしても、仏教はホトケの教えと寺院仏教とを峻別する必要がある、当時は後者が一般的であつた為、日本庶民は宗教仏教とは無縁の徒となり、その意味での日本仏教の墮落が日本庶民の心に仏教批判といらだたしさをつくり出し、これが新来の宗教の教えにひかれる一素地をつくつた。また神道は、天皇と皇室をまもる神々を天皇が主宰して祀るものである上、また神道には宗教教義といったものは無く祝詞ノリトのいよいよ言葉の種々があるのみであるから日本の宗教心篤い人々が新宗教のキリスト教の教義そのもの（免罪符や宗教改革のことはしらず）に心ひかれるのは当然であり、そこにキリスト教日本伝播の一つの根があつた。

日本仏教が教えを忘れ、宗教封建勢力として皇室政権、真実の封建勢力、各宗派毎の寺院封建勢力と対向し、相争つてきた歴史は古く、当時はこれらを背景として一向宗と法華宗の宗論争いに名を借りた勢力争いが熾烈を極めていた。

つまり一向門徒の南無阿弥陀仏と法華宗の南無妙法蓮華経紛争図である。これが前作にもふれたが、能狂言などにとり入れられて大いに仏教教義の権威を失墜した。お釈迦様もこういった事態をどうみそなはしていたか。当時世間に有名になった寺院間争闘に一向宗が比叡山と組んで京洛法華二一宗を焼打した事件がある。天文の法乱、または天文法華の乱（天文五年、一五三六年）という。

当時、織田信長の抬頭によって応仁の乱以来の戦国乱世に一応の終示符がうたれ新しい統一がはじまろうとしていた（桶狭間の戦い、一五六〇）。このとき寺院と新封建諸候との間で争闘がくりひろげられる。これは遠く班田収授の法が破れ各地に豪族があらはれて巨大莊園を営むのにつれて比叡山、高野山、奈良興福寺、その他寺院もこの莊園を自らの手で保持し、拡大し、一大寺院封建勢力として発展してきた。それが持続していたのが、時代の変化と共に新興封建勢力にその巨大土地所有の命脈をたたれ、寺院封建勢力が新封建勢力の中に一大名の勢力として組み込まれる情勢となり、それがこのとき各大名の寺院討伐となつてあらはれたのであつた。即ち大友宗麟の彦山焼打ち、松永弾正久秀の南都焼打ちで大仏殿焼失（一五六七）。信長の一向一揆との戦い、その伊勢長島の一向一揆鎮定（一五七四）、越前一向一揆平定（一五七五）、大阪一向一揆平定（一五七六）、大阪石山本願寺の光佐隆伏（一五八〇）等。この中で信長の比叡山延暦寺全山焼打ち（一五七一）はすさまじくも惨鼻を極め仏敵信長として長く人々の語り草となつたが、寺院一大封建的土地所有の終焉を特に象徴するものであつた。

F・ザビエーの日本に於ける足跡

F・ザビエーが日本で、二年三ヶ月を如何に暮らしたかは勿論重大な問題であるが、その足跡のあまねきはあまり

詳細ではない如くである。日本の切支丹弾圧、凡そ三百年の間にその関係資料は日本で恐らく悉く破却されたので、ザビエーの日本での関係資料は、イエズス会資料やザビエーの書簡に依據しなければならない。従って、詳細は不鮮明たるを免れない。故に諸書それについてはほぼ同様の記述となる。最も確かなものとしては「聖フランシスコ・ザビエル全書簡」の訳者河野純徳の記述であろう。それによるとザビエーの足跡をとどめた地点は、鹿児島（一五四九・八・一五着）、平戸（一五五〇、七月初旬）鹿児島（同八月初旬）、平戸松浦隆信布教許可、一〇〇人程受洗（同一〇月末まで）、山口博多まで海路以后徒歩で（同一一月初旬着）、辻説法を行う。大内義隆にも面会、一二・一七出発ミヤコへ。岩国。便船を得て堺へ、日比屋了珪に会い、そこからミヤコへ、このとき都へ上る貴人についてその駕籠のうしろについた。前掲。二日后ミヤコ到着。ミヤコ、坂本、ミヤコ、堺、一日間のミヤコ滞在のアト便船で淀川を下り、再び堺へ。堺。平戸へ出発、船で。この堺から平戸まで船でいったということであるが、その詳細は不明である。平戸（三月中旬）、多くの受洗者ができていた。三田尻。船でマラッカからのザビエー宛にとどいていた荷物を積んで出発。山口（四月末）再び山口へ。このときは盛装してインド総督の使節として総督ガルシア・デ・ザア（前出）とゴアの司教の親書を携えて大内義隆に面会。彼に高価な進物を贈った。望遠鏡、老眼鏡、陶器、絵画、オルゴール、洋琴、錦らんの布、ポルトガルの衣服、装飾時計、火縄銃、美装釘の聖書、ガラス製花瓶、鏡等一四点。美しい贈物は、極東未知の国ニッポンに海外のロマンを運んだことであろう。（これはザビエーの下へポルトガル船が運んできて平戸におろしたものである。それはザビエーのドン・ペドロ・ダシルヴァー宛の一五四九年の書簡で明らかに、マラッカ出発に当ってこの地区長官はザビエーに、最良の胡椒三〇バレル、日本国王への二〇〇クルサドに及ぶ贈呈品、日本滞在の費用等をもたせたとある。これが事実であるとするとその贈呈品と平戸のそれらとの関係は

不分明である。何しろ史、資料不足の記述であるから、また修辭上のこともあるだろうし、それらの究明はむづかしい。でないと話があはない。即ち彼、最初の鹿兒島行のときは、中国ジャンクに坐乗して命をかけての大冒険航海であつたのだから。ここで宣教の許可を得て、本格的布教に従事する。二ヶ月間に五〇〇人もを受洗者が出た。豊后（二五五一・九月半ば山口を出発、五日後豊后着）このとき府内の沖ノ浜に入っていたポルトガル船は彼を迎える祝砲をはなつた。つまりこの時点でザビエーの日本行とその布教が成功していることがポルトガルにわかり、最初は生死もわからぬ彼を放置していたのが、俄かに態度を改めてザビエー支援の体制がとられたのであろう。それが彼へ贈物を託すことにもなり、ポルトガル船も船として公式に彼を支援したと考えられる。衣食足つて礼節を知るのである。豊后領主大友義鎮はザビエー^{ヨシシゲ}を丁重に出迎え、宣教を許可し、沖ノ浜に住居を与へた。これはそもそもザビエーを豊后に招請したのが彼自身であつたからでもある。領主年齢二二才、宣教師の来訪はもとよりポルトガル船との交易の利をあつくする為でもあつたであらうが、海外の事情を知り、また当時急に名高くなつた異国の宣教師の顔もみたいという青年客気の強く動いた為でもあつたろう。

ザビエーはここを最後に日本も離れる。しかし彼は日本を放棄するつもりはなく、翌年八月には再び日本に戻るつもりであつた。彼は一旦インドのゴアにかえり、後図を策する筈であつた。ザビエーはここで大内義隆が老巨陶晴賢の謀叛にあい、八月二七日に自刃したことを知つた（『聖フランシスコ・ザビエル全書簡3』、河野純徳訳、東洋文庫581、一九九四）。

ザビエーはこの后、中国へ渡る計画をもち、日本行は一応中止して、広東へ向うこととなる。それは一五五二年八月のことであるが、このとき広東近傍の三嶋島に上陸して鎖国中（キリスト教伝播阻止）の中国に潜入しようと苦心

説

し、結局最后はその望みを果さず中国行の志半ばにして該地に客死するに至った。これがザビエーの生涯と日本来、布教、キリスト教宣布の為の諸活動の総括であつた。

論

F・ザビエーの中国渡航計画と死

ザビエーが中国行を決心したのは、日本と中国の關係が非常に結縁浅からざるものがあり、日本は中国文化の影響下にあることを改めて強く知つた為であつた。ザビエーは仏教との対決、仏僧との確執、宗論等で種々困難を感じていたので、仏教の日本渡来は中国から朝鮮を通じてのことであるからその大もとの中国へわたらうとも考えたと思はれる。彼は一五五一年一月に日出の港を出帆（ザビエーの乗船した船はバスコ・ダ・ガマの息子のズアルテ・ダ・ガマが船長をしていた。このガマはザビエーを尊敬しており、自身カソリシズムの極東伝導にも関心を有し、またそれなりの計画ももつていて、ザビエーに種々のことを話した、と思はれる）。広東でサンタクルスという船に乗りかえたが、この船長デイエゴ・ペレイラもザビエーにいろいろ中国のことを語つたので、ザビエーは中国にわたる決心をつけた、と言われている。そして馬拉ッカでまた船をのりかえて翌年の一月末に無事にゴアに到着した。

この船が馬拉ッカに着く前、広東のシャン・チュアン島に來たとき、その乗組員は、ポルトガルからの重大なメッセージに接していた。それはポルトガルが中国の広東の港を開港してポルトガル貿易商人の為をはかり、また通商の禁を犯した廉で逮捕（終身刑）されていたポルトガル商人の釈放を運動することというのであつた。この船が馬拉ッカに入り、ザビエーはそこで上陸する。そこで彼はロヨラが彼をインドと東方の新ジェスイット教会管区の責任者に任命してくれていたことを知つた。任命はザビエーの日本着の翌年に行われていて、それをこのときザビエーは発見

したのであったが、これらの地区はポルトガル管区長の公式の権限 (jurisdiction) 下にあった。イグナチウスのこの任命の意図は、多分彼がザビエーをポルトガル・ナシヨナリズムの見地から種々つくられている制約から彼の宗教活動を自由にしておく為のものであったと考えられている。

一五五一年末迄にザビエーはマラッカからカムボジャのコーチンに移り（一五五二年一月二四日着）そこで種々起っていた彼の新管轄区に関する問題ととり組んだが、そこから再びゴアに赴いた。そこで懸案となっていた聖ポール・カレヅジの最終的調整を成功させて中国へ渡る準備に着手する。彼の計画は中国皇帝に使節となつて中国とポルトガル間に同盟関係を樹立し、両国友好をはかり、そこから中国での布教の可能性を導き出そうというものであった。彼は日本人が中国文化をよく学んでいる実態を十分承知していた。

計画を実行する為、彼は法王と国王の信書を準備し、中国皇帝への美々しい贈物もとのえた。新しい冒険に心をたかぶらせながら彼は一五五二年四月ゴアを離れた。彼の中国行に同行するものは、教区在俗司祭、若きジェスイト教徒、そして聖ポール・カレヅジの中国人学生、洗礼名アントニオ (Antonio) であった。一行がマラッカに到着したとき、異変がおこった。彼等はそこで足止めをくってしまったのである。即ちその地区司令官 (Commandant Alvaro de Astaid da Gama) が一行の行動を疑い彼の権限が彼等に侵害されると猜疑したことからこの様なことが結果したのであった。ザビエーは困難に遭遇すると勇氣百倍する。当然彼は中国単独行を決意した。こうして彼はアントニオのみをつれて、サンシアン (Sanctian) を目指し、マラッカを出発。該地に同年秋のはじめ到着した。そして三ヶ月余の間、そこで何とか広東に渡ろうと苦心する。しかし結果は無であった。鎖国の中国に外国人を導こうという人も船も皆無であった。ザビエーはこの困難の中に一一月末、遂に病に倒れた。病状は重く、彼は回復しないまま、一

説

五五二年一二月三日該地に永眠した。彼が転回しようとながれた大帝国中国の閉ざされた扉を目前にした無念の死であつた。時に四六歳であつた。

論

五、F・ザビエーの信仰と日本伝道

ザビエーの評価

ザビエーの生涯はかく終つた。彼がカソリシズムとキリスト教の世界で偉大なる伝道師としてたたえられローマ教会の聖人に列せられていることは世界的に知られている。日本では特に今日でもすべての人が知っている有名人の一人となっている。つまり誰知らぬものはない。ザビエーは人間的には「貧困、純潔、献身」のジェスイットの教義を守り、その実践を身を以て行ったこと、特に日本ではそれに徹した生活をしたことは、否定し得べくもない。しかし彼の日本来や印度、マラッカでの布教が、ポルトガルの、聖書を頭上にかかげた世界植民地帝国建設のためのものであつたことは屢々ふれた如くである。（このことについては新資料が色々陽の目をみている。例えば次の様な記述がある。日本切支丹禁制についての理由は「秀吉も家康もイエズス会の日本占領計画に気がついたからである。フィリピンから兵隊、弾薬、大砲、食糧と軍艦三、四艘を派遣してもらいたいか、日本は海軍力が弱いから九州か四国を封鎖する作戦はどうか、まず志岐（熊本県天草）を占領して艦隊の軍事基地にしようというような在日宣教師が出した手紙が残っている。彼等は軍事力で征圧した日本を植民地にし、政治力でキリスト教の国に変えてしまうことを眞剣に検討し、実行に移すことを考えていた。『少年たちの幸福と不幸』 泉秀樹、レター二〇〇〇年、五月号」。

ザビエーに対するカソリスズムの褒めことば、は次の如くなる。

偉大なる天賦の才能にめぐまれたオーガナイザー。その顔だちは精神的優勢を示し、ナザレ人の火の様なそして快活な気性と、貴人の鋭敏さ、パリでの深い学識、そしてバスクの人々の不屈の忍耐心、そして恐れを知らぬ勇氣とを併せもった人格。彼の開拓者伝道ははじめて接する異国の言葉、宗教、文化等の中でのどの形而下の諸困難をおかして達成された。

彼は最初の日本へのジェスイット伝道師であり、日本へのキリスト教伝播の土台を据えた。即ち十六世紀末に日本が鎖国に入るまでそれはキリスト教の大きな希望の星であった。カソリスズムはその後も決して死ぬことはなかった。特にザビエーが日本での第一歩を印した九州は、依然日本のカソリスズムの牙城である。

ザビエーは一六二二年イグナチウス・ロヨラと共に聖者の列に加えられた。彼の遺体はそのしずもっていたサンシアン島とマラッカから移されてゴアの大聖堂（Cathedral 司教座聖堂）に安置された。彼の祭日は一二月三日である。一九二七年法王は彼を全海外伝道者の後見者に命名した。

これがザビエーに対する一般の評価であるが、これ以上はない褒詞であることは言う迄もない。これは勿論、スペイン、ポルトガルにつぐ世界植民地帝国によつてつくられた評価である。そしてこれに日本にも全くといっていい程そのままうつし植えられている。それは日本が帝国植民地時代のことであり、逆にこういつたザビエー評をうのみにしていることは日本も大日本植民地帝国の発展、伸展をそのとき心内で望んでいたということになるのかもしれない。ザビエーの日本来の目的である布教活動の内容が次に問題である。これこそが問題であるといつていい。その日本での足跡は一応辿つたのであるが、ザビエーはどの様な教義をどの様にして日本で広めたのか、それについての彼の

心状は如何なものであつたのか等について考えなければならない。

ザビエーの布教の態度は、剛直、攻撃型、それに基づいた民心収攬であり、カソリシズムと法王主義一辺倒で凡そ妥協的政策的ではなく、いはゆる現実主義といった風はみられない。もつとも日本では彼はイエスイットの三徳を守り実践する生活をつらぬくのであるから、この主義は彼の人間的側面を示すのみで、もちろん喧嘩、鬭争をしかけるといったものではない。これを基本として彼の布教の根本義は、

(一) カソリシズム、法王主義を広めるものであり、その意味のキリスト教伝播であつた。即ちイエスイット教団設立の義と法王の認可をきびしく遵守するものであつた。その意味で反宗教改革と呼ばれるべきものである。一世紀末からはじまつたイスラムとキリスト教の戦いは、最終一六世紀までつづき、これに完敗したキリスト教はスペイン、ポルトガルを先登に世界植民地化の政策と実行に狂奔する。その大義名分は未開の闇に沈んでいる人々の魂を救うというそれであつた。そしてイエスイット教団はその魂の救済を前面にかかげて、この場合、ポルトガルの世界植民地開拓に便乗するものであつた。しかし実のところ印度や東南アジアには同様の目的で既にカソリシズム各宗派が入植して布教その他の活動に従事、活動しており、イエスイット教徒の入る余地はなかつた。それは前出のザビエーが、該地の布教活動に関し蒙つた態様をみれば思い半ばにすぎるものがある。

従つてザビエーとイエスイット教団がその面目と特長を発揮するのは他のどこでもなく日本であつた。実に日本行こそは彼等にとつて起生回生の大ホームランであつた。日本への渡来、日本での布教、これなくして、彼等のレーゾン・デートルはなかつた。日本での植民地化活動の表芸としての布教、弾圧、たたかい、殉教、宣教師のあくなき決死の日本潜入、これらがイエスイット教団をイエスイット教団たらしめ、日本の事端を百方繁くし、イエスイット教

団の名をキリスト教史にまた世界史に不朽のものとして天に高からしめた所以のものであった。日本フランシスコ・ザビエーを生み、彼イエス・キリスト教団の名を不朽とする。皮肉なものである。これを忘れてはならない。そして日本が蒙った大迷惑もまた忘れ去るべきものではない。

一、イエス・キリスト教団のかかげる、貧困、純潔、献身の三語をみれば、即ちこの三語のみをみれば、そこにイエス・キリスト教団の宗教団体としての社会的使命があり、それは人々の社会的生活、社会的活動に於て、宗教改革をめざすもの、即ち人々の純潔の再生維持、貧窮への訣別を働きかけるものと受けとられかねない。しかし実体はそれらと全く異なり、天地の差があった。全くの反宗教改革であつた。つまりイエス・キリスト教団のつく三徳は、すべての教団員の上長に対する、即ちイグナチウス・ロヨラに対する絶対帰依であつた。それ以外のものではなかつた。そのための従属、服従の契機としてこの三徳が教義とされ、主張されたのである。それは教団内のハイエラキー秩序の為にすぎなかつたのである。そもそもそこには社会的進歩、発展をめざす何ものも無い。この三徳をもとに眞底から世を淨化し、人々の魂を救うなどといったら、とてもことに他国の植民地化などは出来る相談ではなかつた。そこにイエス・キリスト教団の眞面目があつた。そしてザビエーにその最も無批判にして忠実なるイグナチウスのしもべであり、カソリシズムと法王への純潔、貧困の献身者であつた。

一、ちなみにこの宗教改革反動と宗教改革から起つた同じキリスト教（非カソリシズム）に根ざす農民戦争のかかげた綱領とをもう一度ふりかえつてみるとその相違が際だつ。ドイツ農民戦争の指導者達（T. Munzer, A. Pfeiffer, M. Gaismyr etc.）が、かかげたそれらは次の如く要約される。そこには共產主義思潮とブルジョア民主主義的思潮が主張されている（その教説の半にこれらが混在している）。

① 自由と平等が支配する。

② プリンズや大公達は新しき福音になじまない。従つて彼等は覆滅されねばならぬ。庶民は福音を信奉し、従つて彼らは尊重される。

③ 神の国の市民とならぬものは追放され、また殺されねばならぬ。

内なる光の目覺めをさまたげるものこそはこの世の富である。従つて神の国に於ては、私有の富は存在してはならぬ。あらゆるものは共同で所有されねばならない。

まことに明確な共産をのべている。こういった思潮も農民戦争で力強く主張されていた。また次の様な思想も開陳された。それは、眞の神と人々を迫害する者達の廢滅、偶像、カソリックの聖さん式、同聖廟の廢棄。各商品の適正価格、高利貸し、貨幣の劣質化の処罰等と共に、各税、各レンタル料は廢される。一割税は徴収されるが、それは改革教会と貧民の為にのみ費消される。鉾山の全国共同所有。道路、航路、橋、河川は公けに管理され、それらに外敵防禦施策がほどこされる、等。

右がドイツ農民戦争中それを指導する綱領としてかかげられたものである（大經法大法学論集、四六号、「朝鮮中の抗日と大日本帝国の瓦解」九。四七号）

これらはまことに目覺ましい相違で、そこに所謂進歩派と反動派のあまりにも明確な対比が示される。それが何れも宗派を中心として展開されているところ、しかも同じキリスト教内の分裂抗争であるところが何とも言えず、異教の民である我々には宗教として理解の外である。しかしそうはいっても仏教でも屢々ふれる如く同じ釈迦牟尼仏の下で種々の宗派がきそいたつて相争うのであるから宗教の教義とは一体何であるのかということは永遠の謎であり、そ

の解決は永遠の課題となろう。但し日本神道ではその様なことはなかった。勿論それにも種々の宗派はあるが、歴史的に仏教やキリスト教の様な争闘は起らなかった。それは神道に仏基両宗の様な教義がないからであろうか。考えさせられる問題である。

ザビエーの教義と布教

ここで我々はザビエーが日本で行った布教とその教義の内容について考えねばならない。ザビエーの布教の内容については次にのべるが、ザビエーが、ポルトガル東南アジア植民地帝国確立と安定の為に日本へやってきたことは屢々のべたが、彼の日本に於けるその為の活動はスペインやオランダの植民地王国建設の為のピサロやコルテスその他と事変はり、純粹にキリスト教教義をもって日本人を教化し、彼等をクリスチャンに改宗させることを目指した。即ち例えばスペインのコルテスが軍隊をもってテスクコ (Tezcuco) 湖上のメキシコ首都を苦心の末攻略し、またピサロが奸計を以てペルーのインカ (Incas, Kingdom of Quito, Atahualpa) を討滅した軍事行動とは無縁に、専ら日本人クリスチャン化一本につき進んだ。そこに種々日本武力攻奪の企てもあったのであるが(日本の武力からして、メキシコやペルーでの実行は不可能であった)、ザビエーと初期のジェスイット教徒は、専ら日本人クリスチャン化政策であった。それは即ち理論的に、この日本人教化が進展すれば、日本人クリスチャンが増え、増加は増加を生んで、果ては日本人総クリスチャン化が達成される筈である。ジェスイット教団はこの理論的みとおしと現実的希望をもって日本布教にはげんだ。理論的には日本人総クリスチャン化が達成されれば、日本キリスト教管区は枢機卿(Cardinal)等を設置して日本をローマ法王の直接管轄権に服させることが出来るわけである。理論的にはこれはどこまでも可能で

ある。つまり日本を欧州宗教改革以前、ヘンリー八世英国国教会確立以前の状態で、法王につなげさせ得るのである。こうしてポルトガル極東アジア植民地帝国確立の一環としてのジェスイット教団の日本布教は大義名分を得る。ザビエーはものごとのこの方向に心血をそそいだのであった。

右が一片の妄想であることは言うまでもないので、ここに具体的日本武力攻畧の方途も種々云々されるのであるが、これは早々と日本人の感ずるところとなり、即ち秀吉に於てキリスト教嚴禁政策が打ち出され、これが、ひいて日本をして中韓と同様の鎖国政策に踏みきらせることになるのである。こうして守られた日本の独立と外国侵畧の防遏であつた。しかしそれも一九四五年以後は無と歸した。日本は戦争に負けてよかつたジャン、というのが今日日本の一般である。識者、以之如何。

ザビエー教義の内容

右にのべた如く、ザビエーは、日本総クリスチャン化の道をすすむ。それは日本の人々にキリスト教を説き、それへの帰依をすすめ、一步は二步、二步は三步とすすんでゆくことであつた。ザビエーに従つて日本に渡來した者もしくはザビエーに日本で扈從した者はジェスイット教会師ゴメス・デ・トルレス、ジョアン・フェルナンデス、ヤジローとその弟、彼等の従僕二人（インド人、中国人）、布教の大へんなたすけとなつた琵琶法師ロレンソ（改宗者）等であつたが、所謂「どちりいな・きりしたん」(Doctrina Christa (ポ語))というキリスト教伝播書がつくられるのは、ザビエーよりアトの事である。しかしこれにはザビエーと一緒に來日したフェルナンデスがその編纂にあたり、新來のガゴや後にキリスト教布教に大きな力を振うガスパル・ビレラ等がこれを一つの形の教義書としたと考えられる。

今日伝はっているこの教義書が正確に何時、誰の手で書き上げられたのかはわからないが、その内容は勿論キリストの聖書や一二使徒達の言説の要約であるので、その限りこれをそれらと別つ特別なものと解釈することもない。また例えばザビエーがこの書の編纂等に直接かかはっていなくてもその日本で説教したことが、これと異なつたものである筈もないのであるからこの「どちりいな」が日本に於るキリスト教伝導のザビエー以来の教義書であり、伝導の内容であつたと考えて大過ないと思はれる。

それでこれに従つてザビエーの日本に於ける布教、伝導の内容を考えてみる。

難解である。筆者などは、日本文としては現代文を読むだけであるから余計そう思うのかも知れないが、この「どちりいな」は漢文調というか擬古文調というか一寸とつつきにくくわかりにくい。この文体は「妙貞問答」、「サカラメンタ提要付録」、「御パシヨンの観念」、「天地始之事」等、今日岩波版「キリシタン書」として挙げられているものの何れとも同様である。その上「どちりいな」僅々七〇頁に足らぬ文章の中にわずかのラテン語と数多のポルトガル語が入っており、その数三二〇語にも及んでいる（「キリシタン書、排耶書」海老沢有道、その他校注、岩波書店、一九七〇年）。このポルトガル語はカナ書きで各所重要な個所にちりばめられているので、まことに難解な上にも難解である。当時江戸時代の人々はこれを易々と読むことが出来たのであろうか。

その取扱っている題目は「後生の事、いのりの必要、天地創造、三位一体、びるぜん・まりあ、キリストの一切人間の科を受けての磔死、キリストの再生、十誡、その他、キリスト者の守るべき条々、隣人を愛せよ、告解、神のあはせたもうものは離るべからず、数々の秘跡」等である。

これらは今日、凡そキリスト教義の何れにもみられることで珍しいこともないと思うが、これを近世日本にいきな

りもちこんだことが、反宗教改革として宗教改革派や当時欧州農民戦争の言説と全く違うという意味で画期的なものであったと想像される。これについては後にものべるが、「どちりいな」の信仰のうち、「後生を願う」というのは、何れの宗派にもみられるその根本義の一つであるが、こういつている。へ一切の人間の後生は、一は、信じ奉るべき事、二は、頼もしく存じ奉るべき事、三は、身持を以て勤むべき事、この三つの事に極はまる。一はひいす (Fides ラテン語、以后ラ) 信仰) の善にあたる事也。是人間の分別に及ばぬ事也。是等の事を弁へずんば、後生の道に迷ふ事多かるべし。へ頼もしく思ふ事とは、ゑすへらんさ (Esperanza ポルトガル語、以后ポ) 希望) の善にあたる事也。是即きりしたんにでうす (Deus ラ) 神、天主) より与へ玉ふべしとの御約束の事也。是等の儀を知らずんば、難儀にあふべき時、頼む所なしと思ひて、心を失ふ事もあるべし。是又あにま (Anima ポ) 靈魂) の大いなる障り也。へ身持を以て勤むべき事とは、かりだあで (Caridade ポ) 愛) の善にあたる事也。是等の事を心得ざれば、でうすの御掟をそむく事度度あるべし。難解な所以は、言言、句句、示唆的で合理的な説明を与えないことである。ただ祈り、信ぜよということである。この後生云々は、イスラムでは、臨終の際に天使があらはれて、イスラムかどうかを尋ね、そうだと答えれば天国に生き、そうでないと言うと未来永劫地獄の闇にしづむと言ひ、仏教ではある宗派は念仏を唱えれば悪人も成仏し、いはんや善人に於ておや、と仏と成ることを説くが、この「どちりいな」は次の様に教える。ぜんちよ (Gentio ポ) 異教徒) と悪しききりしたんとは、終わりなくゐんへるの (Inferno ポ) 地獄) の苦しみを受けてながらへ、がらや (Garaça ポ) 恩寵) にて果てたるよききりしたんは天にをひて樂しびを極めて、不退の命を持べし、と。何れも我が仏尊しである。

キリシタンの説明は決してむつかしい義をはずさず、解、不解は別として、これらに正面きつてたちむかっている。

例えば、天地創造はでうすの御作だと主張するが、そのでうすのものを作ることにについて種々難解な説明を行う。

へでうすは作の物を御身の指図に應じて作玉ふと言へども、其御作の物は尊体にはあらず。又でうすはいんひにと (Infinito (ボ) 無限の)、と申奉りて、万事叶玉ふ尊体にて御座ませば、万物を作り給はん為に下地、種、道具などもしらずして、作り玉ふが故に、なき所より作り玉ふと云也。又御作の物は限りある物也。故にでうすの尊体とは、天地雲泥の差別といひても、なをあまり有 (弟子と師匠の問答体をなす)。

弟 右には早でうすと、御作の物の差別を承りぬ。今は作の物いづれもたがひに一体か、別体かと云事を現はし給へ。師 作の物はいづれも別体なり。其故は、でうすより作り玉ふ時、それぞれに應じたる各々のなつうら (Natura (ラ) 自然) を与へ給へば也。其証據は、作の物にあらはるる各々の精徳也。然に、右は馬ノ牛にあらず。他も是に準ず。色相ある物は四大より和合のものなるによて、まてりあ (Materia (ラ) 質料) と云事は一類なれども、正体は各々也。其故は、作のものは、まてりあ斗を以て作られず、ほるま (Forma (ラ) 形相) を以て作らるる者也。それによてまてりあは一類なりとても、ほるま変る時は、正体もまったく変る也。たとへば、同じ木にて馬も牛も作ると云へども、ほるま変るが故に、馬は牛にあらず。此等の事をくはしく分別したきと思ふにをひては、かてきずも (Catechismo (ボ) 公教要理) に載せたる事を讀まるべし。

何とも深遠な理屈の様で、これをでうすの天地創造にあてはめることが出来るのかどうか不可解であるが、これにつきこの注には、「すべての物体は、何の形もなく何にも成り得る元素である質料 (Materia) と、その形と本性を定める形相 (Forma) から成るとするアリストテレス系統のスコラ哲学による説明を (これに) ほどこしている、と言っている (岩波版、前掲書)。何れにしてもどんなことにも正面からとりくんで説明し、キリスト教の奥義を衆に示そ

うという意気込みがみられる。

この他種々あるが、三位一体ということについてこう説いている。

師 眞のうすは御一体の外、御座まらず。是即ばあてれ (Padre (ポ) 神父)・ひいりよ (Filho (ポ) 子)・すぴりうさんと (Spiritus Santo (ポ) 聖霊) にて御座ます事を各々きりしたん弁へ、信じ奉らで叶はざる事也。三のべるさうな (Persona (ラ、ポ) 位各。聖父、聖子、聖霊) にて御座ますといへ共、右に御一体のうす也。此あるちいふ (Artigo (ポ) 箇條) には三の内第一のべるさうなにて御座ますでうすーばあてれの御事を沙汰し奉る也。

弟 でうす三のべるさうなにて御座ましながら、御一体なりといへる理は分別しがたし。

師 其はちりんだあで (Trindade (ポ) 三位一体) のみすてりよ (Misterio (ポ) 奥義) とて、我等がひいず (Fides (ラ) 信仰) の題目の内にては極意最上の高き理也。其故は、でうすは無量広大に御座まし、我等が智恵はわづかに限りある事なれば、分別には及ばず。たとひ分別に及ばずと云とも、でうすにて御座ます御主ぜずーきりしとと直に示し玉ふ上は、眞に信じ奉らずして叶はざる儀也。

三位一体と云うのは、こうなると俄かには、我々には、少くとも私にはまことに難解である。眞に信じ奉らずして叶はざる儀なり、とあつて信じる以外にキリストがでうすで、キリストは常にでうすの右に坐している、といった形相は合理的解釈は無理なのか、とも思う。普通には次の様に説明されている様である。三位一体、キリスト教で、創造主としての父なる神と、贖罪者キリストとして世に現れた子なる神と、信仰経験に顕示された聖霊なる神とが唯一なる神の三つの位格 (ペルソナ) であるとする説。この三者に優劣の差別はない (広辞苑)。これが合理的な説明であるか。「どちりいな」にとくところとは違ふ様である。「どちりいな」はこの様な簡明な割りきった説明を予定し

ているとは到底思えない。これはそのときどきにつき問題となったことの位相に説明が加えられるべきものであらう。体系的合理的科学的説明というものをキリスト教は予定していない。その節々の信仰問題としてこれを説くということであらうか。そしてこれはどの宗教、どの様なオリジナル作品にも当はまることと思はれる。

教條教義はこの他種々の問題を収録しているが、その中びるぜん・まりあ（Vigem（ポ）童貞）とキリストの物語りがある。処女懷妊、キリストの磔死、三日後の蘇生等であるが、その処女懷妊についてはこういつている。

第三のあるちい（Artigo（ポ）簡條）、すびりっさんと（Spirito Santo（ポ）聖靈）より宿され給ひて、びるぜん——まりあより生玉ふと申心は何たる事ぞ。

師　　でうす——ばあてれ（聖父）の眞の御子にて御座ますでうす——ひいりよ（聖子）、貴きびるぜん——まりあの御胎内にをひて、我等が肉体に變らざる眞の色身と、眞のあにまを受け合はせ給ひて、眞の人となり玉ふと云へ共、でうすにて御座ます御所は、變り玉ふ事なく、いつも同じでうすにて御座ます也。此びるぜん——さんた——まりあより生玉ふを名付けてぜす——きりしとと申奉る也。又此御出生は人の業をもての事にあらず、ただすびりっさんと御奇特をもて斗ひ給ふ事なれば、すびりっ——さんとより宿され玉ふと申奉る也。同じく御母びるぜんも人間の所作を以て御懷妊なされざるが故に、御誕生の後とても本のごとくびるぜんに御座ます也。

この様にのべている。ついでキリスト三日目の蘇生についてはこう説く。

弟　第五のあるちい（簡條）、大地の底へ下り給ひ、三日目によみがへり玉ふと云へる事は、何たる御事ぞ。

師　御主ぜす——きりしと、くるすにて死し給へば、御あにま（靈魂）は大地の底へ下り玉ふ也。昔の善人達御主の御上天までは、天上せらるる事叶はざるが故に、大地の底にをひて、其御出生を待ち奉られし人々を召し上給はん

が為に、其所に下り給ひ、彼善人達のあにまを其より召し出し玉ふ者なり。

弟 御主ぜずきりしとの御あにまの下り玉ふ大地の底と云は、何たる所ぞ。

師 大地の底に四様の所あり。第一の底はみんへるのといひ、天狗を始めとしてもるたる科 (Mortal (ポ) 死にいた

る大罪) にて死したる罪人等のゐる所也。二には少しそ上にぶるがたうりよ (Purgatorio (ポ) 煉獄) とてがらせ

(Gracia (ポ) 恩寵) を離れずして、死す人のあにま現世にて果さざる科送りの償ひをして、其よりぐらうりあ

(Gloria (ラ、ポ) 栄光) に至るべき為に、其間籠めをかるる所有り。三にはぶるがとうりよの上に童のりんぼ

(Limbo (ポ) 古聖書) とて、ばうちいずも (Baptisma (ポ古) 洗礼) を受けずして、いまだもるたる科 (大罪)

に落つる分別もなき内に、死す童のゐたる所也。四には此りんぼの上にあぶらんのせよ (Abraham ゆだや人の祖、

Ceo (ポ) 天) と云所有。此所に古来の善人達御出世を待ちゐ奉られたる所に、御主ぜずきりしと下り給ひ、彼

さんとす (Santo (ポ) 聖人) 達のあにまを此所より召し上玉ふ也。

弟 三日目によりみがへり玉ふとは、何事ぞ。

師 せすたーへりあ (Sexta feria (フ) 日曜日から六日目すなわち金曜日) に御入滅の時、貴き御あにま御色体を離

れ給ひ、つぎのどみんご (Domingo (ポ) 日曜日) に御あにま御棺に納められ給ひし御死骸によりみがへり給ひ、今

天上に御座ますごとくなるぐらうりあ (栄光) と共に見え玉ふと云える事も、此あるちいご (箇條) に現はるる

也。

と。

神のあはせ給う者は離るべからず、という教えについては、かたき神の掟として考うべき事と共にその内容の興味

をひくのは、非常に直接現世的で今日でも充分問題となる内容を含んでいることである。次の様な問答がある。色々のべた後で、

弟 我が氣にさかひ、心に叶はざる者に何としても添い遂ぐべきや。かの様の者をつまと定め、夫婦の契約せんよりは、しかし、つまを帶せざらんには、と思ふ者多かるべし。

これは今日、一般に調停、裁判離婚の第一の原因としてかかげられている、例えば性格不一致とかいう事項であらうか。

師 其不審もとも也。然と云へ共、惣じて世間の法にも何の法度をなり其定むる時、万人の徳を量りて、其規則を置く者也。もし其内に人有て、万人の為にはさもあらばあれ、我が為には此方式不可なりと思う者も有べし。たとえば國中より他国へ八木（米）を出す事有べからずとの法度を置かる時、売買を専らとする者の為には不請なる法式たりと云へ共、其ノ国の為には、豊饒の基也。其如くでうすより授け玉ふ御掟もあまねく人の徳と成べき事を量り給ひ、理に随て定めをき玉ふ者也。このまぢりもうによ（Matrimonio（ポ）婚姻）のさからめんと（Sacramento（ポ）秘跡）を以て、何れも人皆深き徳を得ると云へ共、其内にも理にもれ、甘きをきらひ、苦きを好む者も少々是有べし。

これを見るとカソリックは離婚不能でその条件は絶対不変のものである、と考えられ、またそうなつてゆくのであるが、この教義書は何となくもつと大らかで、この場合の弟子による問いかけに、そういうものも少々はあるだろう、といつてゐる様にみえる。だからといつて離婚を許すということになるかどうかはこれだけではもとより不分明であるけれども、問いかけも中々するどいが、その答え、教えも問いかけにのつとつたものの様にみえる。

これにつづき次の様なものもある。即ち夫婦の一人が身持が悪くて生得淫乱な場合はどうするか、それとても離別する事叶はないか、という問いかけである。これについては次の様にこたえる。

師 是もとも肝要の不審也。如此なるにをひては、ゑけれじや (Ecclesia (ラ) 教会) の御定め of 旨にまかせ、たがひに其中をさくる事も叶ふ也。さりながら離別しても、余の人に又寄り合事は叶はず。是も道理よての事也。其を如何と云に、か様のいたづら成者は、又別のつまを持と云共、又右に沙汰せし所の深き損失をし出すべきにて、二度其災でなからんが為に、夫婦を帶せざる様にと定めをき玉ふ也。

問題は今日の調停、裁判離婚問題そのものである。人間五体あり、夫婦関係ある限りこの如き問題は時代を問はないであろう。しかし裁判、調停が今日全く唯物物的であるのと様かはり、このいたづら者に対する解決の為の教えは甚だ唯心的で人間的である。これは離婚は神の定めによつて出来ないが別居しなさい、と云っているのです、それはそれなりに利害があるが、夫婦間問題、裁判、離婚、自由回復という個人主義、自由主義による夫婦問題の解決は社会的国家的に種々の災厄を及ぼすもので、それだけは否定出来ないであろう。

カソリシズムは信仰と信者にきびしい。種々の宗教的倫理道德を課して信者をかたくゆわえるが、その為、宗教改革は、聖職者の腐敗墮落にはげしい反撥となつた。ザビエーのカソリシズムはロヨラのジェスイット教会が、反宗教改革をめざすものであるだけに一層きびしい信仰と信者への戒律となつた。その定めは全く種々のものがある。そして云はばこの「どちりいな」全篇が、その戒律であると云いうるものではあるが、特に次の守るべき教えがある。

まんだめんと (Mandamento (ポ) 掟、戒律) 十ヶ条。ぱっぱ (Papa (ポ) 教皇) の五ヶ条。七つの科。慈悲の所作
一四。そして告解。ここではぱっぱの五ヶ条と告解をとりあげる。

ばつばの五ヶ条

第一、ドミンゴ (Domingo (ポ)) 主の日、日曜日。ベあと日 (Beato (ポ)) 聖人の祝日) にみいさ (Missa (ラ)) ミサ聖祭、聖体と聖血の拝領を中心に共同体的一致を深める儀式) を拝み奉るべし。

第二、せめて年中に一度こんひさん (Confissão (ポ)) 告白、告解) を申べし。

第三、ぱすくは (Pascoa (ポ)) 復活祭) にえうかりすちあ (Eucharistia (ラ、ポ)) 聖体の秘跡。七秘跡は洗礼、堅信、聖体、告解、終油、叙階、婚姻でこれらの儀式にのっとった礼儀の法則) のさからめんと (秘跡) を授り奉るべし。

第四、さんたーゑけれじや (Santa Ecclesia (ラ)) 聖なる教会) より授け玉ふ時、ぜじゅん (Jejum (ポ)) 大齋 (つしむこと)、断食) を致し、せすた・さばど (Sexta 金曜日、Sabbado (ポ)) 土曜日) に肉食すべからず。

第五、ぢずもす (Dizmos (ポ)) 十分一税、教会税、教会維持費。旧約時代にはユダヤ人が生産物の十分の一を神殿と司祭たちのために捧げなければならなかった)・ぷりみしあす (Primicias (ポ) 複数) 初穂) を捧ぐべし。

これらの五ヶ条は、信者たるものは一心に身にそい、どうすの御徳と罪をあがなってくるすに死したぜず・きりしとをおがみ、祝日を忘れずつとめなければならぬ、と教えられた。このための捧げものは、一には御恩の御礼として、二つには、我等が科の償いとして捧げ奉るべし、とし、三には、なをいやましに御恩を受け奉らん為に捧げ申すべし、とされた。何れにしても身も心も一心にカソリシズムに捧げ詔書必謹でその教えに従う事が求められるので、その根元の命令がこの五ヶ条であった。疑いを知らぬ超従順なカソリシズムの信者が求められたのである。まさにイエス イット教団のめざす反宗教改革の尖兵の養成であった。そしてこのときどきのおらしよ (Oratio (ポ)) 祈りの言葉) は

次の如くであった。

「一切の人を扶け給はん為に、くるすの上にて、流し玉ふ御主ぜず―きりしとの尊き御血を拝み奉る」と。

最後にキリスト者たる為には、懺悔の行いが求められる。即ち罪惡を自覺し、これを告白し悔い改めること、を求められるのである。(一) これはまず身心を清めること、何人も日常生活で大小にかかはらず罪や科を犯す。身を汚す。人間世界では生活する上にこれは避けられない。それを神に申達してこれら邪惡を払い、身心をきよめるのである。これは普通かみやほとけに参詣することでその目的を達する、というもので、お参りして身心ともにすがすがしくなった、ということであるが、カソリシズムではこれを一段も二段も深刻に行う。これが告解である。(二) こうすることによって、自己の罪とその意識を大小に不拘神(司祭)にあかすからは、信者は神に緊縛される上にも緊縛され、神に従うこと、尊ぶ事、ぬきさしならぬものになってしまう。キリスト教の賢明なる所以であり、またおそろしい所以でもある。そして(三) こうまでして身心をきよめた上は、神を除いては、信者は今やおそろしきこと、はばかることは何もない。こうして信者は生まれかはり、神の加護の下に清浄となつて強き、自信にみちた人格と再生するのである。これらが告解の効果であつた。

告解につき「どちりいな」は、次の様に教える。

弟 何とてせめて一年に一度とは宣ぞ。

師 さんた―ゑけれじや(聖なる教会)よりは度々科に落つることく、こんひさんをも度々申せと望み給えども、せめて一年に一度、二度と定め玉ふ者也。其故は、身のしげく汚るる度ごとに、清むることく、あにま(靈魂)も惡を以て度々汚るるによつて、度々こんひさん(告解)を申て清むべき事専ら也。又死する難儀に及ばん時と、

貴き多うかるすちや（聖体の秘跡）を授かり奉らんと思ひたつ時、こんひさんを申べし。是即もるたる科（死に至る大罪）を犯しけると明に弁へ、又は疑う心有におひては、どうすの御定めに随てこんひさんを申べき也。

弟 達して（充分に）こんひさんを申為に、専らなる事は何ぞや。

師 専らなる事三あり。一には、謙（へりくだる）る事。二には、眞実、正直に現はす事。三には、科を残さざる事、是也。

弟 何と様に謙るべきや。

師 コンヒサン（告解）を申人、我が心中に悪人也と思ひ、科の御赦しを蒙るべき功力なしと弁へ、デウスの御前に直に申上奉ると心得、深き敬ひ、恐れをもて後悔し、我と身の訴へ手となりて、我が科を懺悔すべし。

弟 眞実、正直とあるはいかん。

師 我が犯さぬ科を現はさず、又恥かしく思ふ故か、又は何たる子細によりてなりとも、我が科をかくせず、明に懺悔し、いまだ思はず、又は思はんとする事までも、知しめしつくし玉ふデウスへ直に現はし奉ると心得べし。

弟 もるたる科を残さずとは、いかん。

師 我が身のコンシエンシャ（Consciencia（ポ）良心）をこまかに糺明して、思ひ出すほどの科を懺悔する事也。

まずこういった事であるが、これをみれば我日本民族が如何にこれらの教えに生来的に当てはまっているかを知る。上に対し従順で、身を処すこと承諾必謹にして犯さず、一旦緩急あれば上長に従うこと何の疑いも悔いもない民族であるからこれら「どちらいな」の教えはすでにして日本人一人一人の身にそなはっている。既にして教科は不必要なのである。

ジェスイット教団がこの日本人をみて、まことに我が意を得たり、と感激した事は想像に難くない。まさに日本は彼等にとつては百花繚乱、貪り食う百果樹々になりあふれた地上の花園であつたろう。

六 F・ザビエーとイエズス会日本布教の成功

布教の方式

ザビエーのキリスト教布教が大いに成功し三〇〇人、五〇〇人という集団入信も行はれたという事であるが、これによつてイエズス会、その他の日本をめざすキリシタン伝道が時に随い追々盛んになつていったことは青史に明らかなどころ、その盛況の原因、何故日本でその様にカソリシズムが根付いたのかを一瞥する必要がある。

まず第一は右にあげた日本人の性行が、ロヨラの反宗教改革、ジェスイット教団の教えにびつたり一致していたことがあげられる。これについては、既にのべたので繰り返さえないが、日本に昔から流行しているゲームに王一つを守つてその他の駒が全部討死にしまふというのがあり、これがそういった日本人の性質にまことによく当はまつていて、その流行は何時も大へんなものである。日本人はそのルールに無意識になれ親しんでいて何の疑いもない。しかし一寸沈黙考型の民族にとつては、その意味は深刻なものがあろう。その流行は、江戸時代、明治以来、デモクラシーになろうが何の変化もない。(このゲームが何時頃から日本に入つて盛んになったのかは、わからない。幸田露伴などがそのルーツをさぐつたが、その足跡はアジア中央の砂漠の中で消えてしまつたと言う)。西洋にも似たゲームがあるが、内容と意味はだいぶ異つている様である。事大主義の人々にとつては、ジャーナリズムに支配され

ていても新聞記者と事を構えたりすると、大人気ない、などといった威張ってみせる。判断力について考えなければならぬことは多い様である。

二、ザビエーのカソリシズムが日本に容易に受入れられたのは時代の故であるという説がある。即ち当時応仁の大乱が都を荒廃させ、また土一揆、土倉（金融業）一揆、馬借（運送）一揆等が全国的に頻発、日本国を寧日（平和無事）なき状態に陥入らせてい、また和寇が猖獗して対外関係も風波高く安穩の日々を欠いてい、日本の人心とみに不安、焦燥の極にあつた為、難有いキリストの教えを弘布されると、人々、忽ちこれにひきつけられ、キリスト教に帰依して身の安穩と平安を願い、日本国の静安と平和を祈りの中に求める様になつた。これザビエーのカソリシズムが日本に容易に受入れられた原因なり、という主張である。

しかしそんなことは無い。世界、国家多く、民族また多くある中で、日々を何らかの原因による不安と焦燥の中に過ごさないものは無く、またそれが無い様な例は無い。不安と不穩の中に生活するのが常態である。人々は何処でも何時でも困難と不安の中にいる。されば洪水の様にニュースが内外山積して世界をかけめぐる。何時の時代でもそうである。それが特別の原因となつてキリスト教がどこかの国に社会的に受入れられたという様なことは有り得ない。ザビエーや従者のクリスチャンも日本のその様な現状に無智でやつてきたのである。その様な騒乱をあてこんでカソリシズムを日本にひろめ様とは夢にも考えなかつた。来日してみればその様な状態であつたというだけのことである。ザビエー渡来の日本の社会的国家的状況をその背景として説明するのは大へん結構でまた必要であるが（前述の如く）、それはそれであり、カソリシズム伝播とは何の關係もない。

その弘布の盛行の原因はもつと一般的な国家、社会、人格の性質に求められなければならない。

尚ちなみに言えば、仏教伝来についても、当時日本社会は生産力の増大で豊かになり、支配階級も被支配階級もそれなりのイデオロギーを必要としたところ神道その他の宗教はあまりに性質上理論素朴でこれら上下の必要をみたさない。そこへ仏教というその面ですぐれた緻密な宗教が流入したので、上下特に為政者は右記の必要性から仏教を受け入れた。この時代背景なければ仏教の日本流入定着はなかったという様な主張がある。これはマルキシズムのイデオロギー論と生産手段、生産力・上部構造論からの発想かと思うが、ただこで言えることはそういった為政者が民衆支配のイデオロギーとして仏教を受入れたという様なことはない。そんなイデオロギーは仏教のどこにも見出せない。どんな経典の中にも一言も無い。為政者が仏教で国を治めたのは、仏教を利用したので、それ以外の何ものでもない。本来の仏教の教えと為政者が利用したハイエラーキの仏教とは厳然と区別されなければならない。聖徳太子の子息の山背大兄皇子が入鹿にせめられて無抵抗で一族と共に命をたつたというのが、本来の仏教の経典にとくところに近いものであろう。民衆の側のイデオロギーとしてあきらめと従順と来世観を仏教が釈迦の教えとして人々に植付けたので、それを利用したのが、為政者であり、奈良朝、徳川政権であつて、そういう利用や国家支配のイデオロギーというものは仏教の本質とは何の関係もない。為政者の悪用であつて、そうしろとは仏教のどの経典にも一言も書いてない。

ちなみに言えば、日本では神道は神聖を尊び、豊饒を願ひ、祭祀を行い（葬は神葬祭とよばれる）その賑々しさを喜ぶ。穢れを忌み嫌うこと極端で、それと惡、仇を封じ込める。仏教は死をみすえ、取扱ひ、これを美化して、来世を描き極楽を招来する。厭離穢土、欣求淨土を祈り、すべて死後の世界を中心とし、それに専らにかかはる。日本では神道、仏教はこの如く右の守備範囲を画定し、お互いに賢明に人々の為にその存在をすみわけた。日本人は正月に

は神道に参詣し、祭礼を盛んに四季にとり行い、盂蘭盆会（陰暦七月一日—十五日 Ullabana（梵語）、祖霊を死後の苦しみの世界から救済する為の仏事）には、寺院に参詣する。かくして多神教（神仏共に）の性質を極端に利用し（神仏習合説、本地垂迹説）両教併存という世界に稀有な現象を展開している。

かくザビエー・カソリシズムの日本伝播については次の如き原因が考えられなければならない。

布教成功の原因

ザビエーが来日した頃仏教は寺院仏教として、大化改新による公地公民制がおとろへ、荘園が大いに私領私民を増大したのに乗じ、比叡山、高野山、紀伊根来寺等をはじめとして諸国の寺院が寺領を所有し、これを拡大し、守護の僧兵を集め勢力をため、一大封建領国の如き観を呈していたのを破壊するたたいが展開されていた頃であった。これを断行したのは織田信長であったが、彼の仏教観は次の如きものであった。

一、偶像の嘲罵、二、卜占の軽侮、三、非来世観、四、祈りの無（七福即生七難即滅等）、五、礼拝の無。信長は、この世の外には如何なる他の生もなく、また人に見えざる如何なるものも無しという人生哲学を有し、唯物的で覇權的であった為寺院破却、焼討などを実行したものとして、その信長政策の内容的等については種々のものが考えられるが、ここで大事なる事はこうした信長の実行が、日本に於けるザビエー・カソリシズム布教に直接影響した事はない、*「つごう」*とである。こうした考え方については前にもふれたので省略するが、信長がルイス・フロイス（Luis Frois 1532-1597）やオルガンチノを親しく引見して安土等にセミナーや会堂の建立を許しているのは、たしかに彼の破仏教観からもきていえると思はれるが、それも長続きしなかった（フロイスの来日は一五六三年、信長の本能寺討死は

一五八二年）し、信長がジェスイット教会の侵襲性に無智であつた為である（秀吉の所謂二六聖人処刑は一五九六年一月）。尚重要なことはこれらの信長の性格や政策は政権内のことで当時一般民衆とはかかはりない世界で行はれていたことであるから信長の仏教討滅が民衆の仏教観に直接影響することもなかった上、ザビエール・カソリシズムの伝播に直接影響することもなかったと考えねばならない。即ち織田信長が擁護したのでカソリシズムが日本に流行した、とか徳川政権がこれを弾圧したのでカソリシズムが根絶した、とかいう事はない、という意味である。

ポロシモを愛せよ

日本人は前にふれた如く仏教から見はなされてしまつていて、寺院仏教となつた仏教はただ民衆を支配するか、政権のそれをたすけることしかしなかつた。釈迦の教えの従順、あきらめ、来世に極樂を求めるといった哲学は、民衆支配の教えとしてはうつつで、日本の諸政権はこれを為政の根本義として利用したのであつた。釈迦の仏教と寺院仏教とはここに截然ときりはなされたのである。衆生済度のおしえが、衆生抑圧へのそれと転化せられた。これにつき多くを言う必要はない。上代寺院支配の実績とその支配領土の広大を一瞥すれば足りる。即ち高野山は領土、紀伊全国にあつたと言う記録があり、東大寺は一万町歩の領国を支配し（嘉祥元年八月、八四八年）尚、八千戸の食封（俸禄）を有した。これは一五万石、八千人の支配にあたるという。法隆寺は一二万三千石を領有し、その他興福寺、薬師寺、大安寺、諸国の国分金光明寺等は各一千町歩、大倭の国分金光明寺は四千町歩、四天王寺、崇福寺は五百町歩の寺領を支配していた、という。各寺院の同様の記録は枚挙にいとまない次第である。これだけの領国、人民支配であるから当然これを守る軍備が必要でそれが僧兵となつた。その勢力盛んで寺院間の争いはもとより、朝廷をもこ

れらがおびやかしたので延暦寺、圓城寺の僧兵に備えるために、朝廷は源義家に三千の兵をあててこれを守らせた、という（日本農民史河西省吾編、古今書院、昭和五年二月再版）。お釈迦さんも日本では大へんな事情である。

この様な工合で、ザビエー来日時代にも事情は大して変わらず、第六天の魔王信長がこの幣を矯めんが為に寺院征伐を敢行したが、その政権亡んでからは、徳川家康が、仏教を以て立国の基としたから寺院仏教の隆盛は正に国家事業となり、信長が心血をそそいだ一向一揆討滅も結局本願寺の盛大と変じ（強勢をそがんが為に東西両本願寺に分割）、その影響、皇室にも及んで今日に至っている（昭和以来の寺院内部の支配権争いは激しい）。

ザビエーのカソリシズムは「どちりいな」に示された如き宗教論を民衆の間に展開したと考えられるので、その点は、民衆も釈迦仏教からみはなされて、はじめて宗教論らしき宗教論に接した、ということとは否定出来ない、と考えられる。しかしその様なことより、当時の日本民衆がこれにひかれたのは、ザビエーの「どちりいな」が民衆を同胞とみ、隣人としてこれをカンパニーたる扱いをした為であった。この事が重要であった。

由来日本人は仏教によって完全被治者の立場におかれたが、日本古来の神道に於ても民衆はその祈り、まつりの対象の外に置かれてきた。神道は八百万神と皇室関係の神々をのみまつり、産土神は土地の神にすぎなかった。庶民とは何の信仰の関係もない。それでも日本国民はこの神道を信じた。これを祈って現世の幸せを願い、穢れと仇をはらうことを衷心祈った。それが天皇制（天皇という言葉は何時頃から使はれたのか、多分律令制の下でかと思はれるが、古くからすめらみこととかすめろぎという言葉があり、これらが天皇を意味していた。例えば万葉集（15）すめろぎのとのみかどとかいう言葉がある。で、物事を分明にする為、これらをすべて天皇という表現を用いてここでは必要事を示す）下に於ける庶民の生きる道であった。彼等は天皇制ハイエラキーの中に生き、その中で安穩、平穩に

生きることを願った。天皇は日本国の主権者であり、八百万神から生れた神のすえであり、神そのものである。そして八百万神と皇室関係の神々を祀る祭主である。これが天皇制下の神道として日本国民に祈りの中で広く深く信じられた。「神の国」理論である。この信仰は「古事記」（現存する日本最古の歴史書という意味で）に於て成文化され、天照皇大神の孫瓊々杵尊が大神から「このくには、わがうみの子の君たるべきくになり、爾皇孫ゆいて治めよ、さきくませ」という神勅を授つて日向の高千穂の嶺に降臨したのであった。爾来二千年世界無比の皇統連綿として不変である。（法学研究所紀要二八号、「朝鮮中の抗日と大日本帝国の瓦解（四）」、拙稿「第一章孝明天皇と明治維新」参照、尚、この現象は一六八八年のドミニカ派日本報告にもせられている）。天皇制権力は絶大であつた。今上天皇を大王と呼んで他の豪族と並列関係に置こうとする試みが一般であるがそれは誤りである。西暦と国史歴六六〇年の相異は問題であろう（例えば神武天皇年齢百二十七歳、神功皇后、摂政七〇年、年齢一百歳）が、例えば次の一事をみても天皇の存在とその権力の強さを疑うことは出来ない。

即ち臣、連、大連、大臣、伴造、部曲、品部、国造、封戸、食封、季祿等々の官職、稱号、俸祿等はすべて天皇の定めたか又はその名によつて定められたもので、大臣蘇我の馬子、大連物部尾輿等みなそうであり、天皇の臣下であつた（最近、騎馬民族日本征服説とか、種々の起源論の学説が出ているが、中には、日本の皇室は韓国系渡来人で蘇我氏も明らかにそうであり、それは加羅国が古事記の天孫降臨説と同様の始祖談を有していることと、加羅国の金氏が日本にわたつてキミという氏族になり、その大きなものをオオキミと呼ぶ様になったそれが日本のスメラミコトである。蘇我氏もオミ族の大きなもので、キミ族とオミ族は同等で君臣の関係はない、という言葉説がある。しかしこれは誤りである。又日本皇室が騎馬民族系であらうと、韓国渡来人であらうと、皇室となることに八百万神の信仰と

延喜式（九二七年）にのる程の多くの神社を祀っていた権力であつたことを忘れてはならない。今日国史学が疑いを持たざるのが常道で、疑はしき学説を併列して記載し、それで足れりとして、判断や結論をのべないとしたら、これでは学問ではないので、疑はしきを疑はしいとのべるのが、眞の科学的良心の吐露だなどと誤解してもらつては困るのである。一つのあやまちを犯さない為に百の眞実をおおいかくしてはならない。これは他の部面でもみられる。例えばもし医学でも、こういうことはあり得ないこととして、患者の治癒が目的の学問なのに医学の為の医学となつて決して病名などは決定断言しなくなつたら由々しき大事とならう。即ち病氣には病名を特定せず何々症候群などと曖昧模糊として括淡としていたとしたら、これでは困るので病氣といつて氣を病むのが病氣であるからすべからく患者の治療の為の医学であつて欲しい。こんなことは決してないが、裁判などでももし一つの誤審を犯さない為に、百の犯罪を決定せず、執行猶予などという（事物を疑つて容易に何かの断定をしない）無罪判決ばかり出すとしたらこれも甚だ困つた事にならう。宇宙科学でももし疑はしい計算を決定せずに種々、宇宙船につきこんで発射するとして、機械は製作者の意図を忠実に讀みとつて決定的飛行をせずに途中で爆発してしまうことになる。極端から極端にうつるのが日本的であるけれどもし万一、右の様なことがあるなら敗戦の自信喪失はもういい加減にやめて、すべての面で自信を回復し、人間的生活基盤で事物を処理して欲しいものである。

日本庶民は、ザビエー渡来時（その後も変わらず同様の状態であるが）完全被治者、被利用者の立場におかれ、宗教的のみならず、勿論社会的、政治的にもそうであつた。彼等はたてわりのに直接の上長に結び付けられ、その権力構造の底辺にうごめいていた。凡そ横の連絡はなく、友愛的、共同的連携はなかつた。つまり後に一般論となる自由、平等、独立、友愛は当時国民的要素として棄にする程すらなかつたことは勿論であるが、第四番目の要素の欠如して

いる事は、日本民族に於て歴史的に明瞭な一段の特性であつた。ザビエー当時これが日本庶民に欠けていた事は言う迄もない。日本の慣行は集団に於て仲間的であり、利害関係内部の結束は固く、それ以外の集団は敵であつた。これ、封建制にも領国制にも立憲の選挙制に於ても当はまる。日本が明治以来立憲君主制の選挙制を他にぬきんでて発展させたのは、一面この歴史的仲間精神の活動のたまものであつた。朋党の精華であつた。しかもこれはデモクラシーに於ても何等変らない。

ザビエーのカソリシズムはこういった日本庶民を友愛の精神でとりあつた。朋党ではなく同胞として取扱つた。彼等はカンパニーであつた（その後の種々の宗教団体はこれを形式的な教則としているが）。これは当時の日本庶民にとつて大きな驚き以外のものではなかつた。よくしてくれる。親しくしてくれる。これである。今迄経験したことのない他人が自分達を兄弟姉妹、はらからとして取扱つてくれる。これが彼等を新鮮に引きつけた。これがザビエーのカソリシズムに庶民が魅力を感じた最大の原因であつた。キリスト教伝播の第二の原因であつた。

カソリシズムは、人を穢れたる罪深きものとみる。その為に種々のおきてを定め、道徳倫理の定めを人々に課して身の悔い改め、清浄なる再生を誓言、実行さす。キリストはこの万人の罪を一身に贖^{ツグナ}つて十字架上に死したるが故に、人々の贖罪のあかしであり、尊き存在である。これにつき例えば「どちらいな」は、かくのべる。

いづれのクリシタンも我等が光なる御主ゼズークリシトの貴き御クルスに對奉て、心の及ほど、信心を持べき事專也。其故は、我等を科よりのかし給はん為に、かのクルス上に掛かりたく思し召し玉ふ者也。其によて我等が上にクルスのしるしを常に唱ゆる事肝要也。ヘクルスの文は三所に唱る也。ヘ一には、額、ヘ二には、口、ヘ三には、胸也。

ここから人々が常時恐れつつしむことと、人々が互いに睦み合うことの教えが派生する。これが汝の敵を愛せよ、人右の頬をうたば、左の頬を差出せといった教えもでてくるのである。隣人に対しては、しかるが故に、

万事にこえて、デウスを御大切に思ひ奉る事と、わが身を思ふごとく、ポロシモ (Proximo (ポ) 隣人) を大切に思ふ事は也。

とまた、

人に対して仇をなさず、害せず、疵つけず、此等の悪事を人の上に望まず、喜ばざるをもて、保つ者也。其故は、我等がポロシモは皆デウスの御写しに作給へば也。と言っている。

ザビエー・カソリシズムの同朋愛はかくの如き教えとして日本の庶民をその身にあつめ引つけたのであった。

キリスト教祭祀とキリシタン

日本で切支丹が追々増加していったその伝道成功の最後の要素は、第二の原因と密接に関連していることであるが、キリシタンはカソリシズムにまつわるキリスト教の種々の祭祀に夫々会堂やそれがないところでは、信者のそれという家屋に集まって各祭祀を祝い、キリストに祈り、説教をきき食事を共にしてまことに仲睦じくカンパニーとして振舞った。即ちここにいう第二の要素の具体化、顕現化としてのクリスチャン祭祀の実行であった。この様な会合は、日本では当時まことに希有なことで（後こういった会合は宗教団体のみでなく各団体に一般となるが）、人々は喜び楽しく集会し、その祭りに満足して散会した。それに毎日の実行に日曜日毎に信者は集まってミサ (Missa カソリシズムで聖体と聖血の拝領を中心に、神に感謝し、共同体的の一致を深める儀式) を行い、讃美歌をうたい、オラシヨを

唱えて主の祈りをささげた。これも彼等には人間的に相許し合える集まりの極点の楽しみとなった。こうした会合に庶民は喜びをみつけ、安心の境地をみだして参集したのである。クリスマスやキリストの昇天祭、復活祭、四旬節、聖母被昇天祭等（キリスト教官許の祭礼となる年代は種々あるが、こういった祭りの本体となる信仰のまつりは、キリストと共にあつたろうからそういう意味で）、これが日本キリシタンの間で祝はれたことは疑いない。

またキリシタンは神父においてドネーション（寄付）の慣行を盛んにし、これを貧民の救いにあてる実行を行い、ダルカセヴァ（ザビエー以后に来日）をしてその強い愛のこころに「私は彼らと交わつて、自分が恥ずかしくなつた」と一種の驚きを以て言わしめる程の隣人愛を示したのである（鎖国（上）和辻哲郎、岩波文庫）。ジェスイット教徒達は日本に於て病院をたて、病者の治療にも種々努力したが、死者のとむらいにも宗教として万般の心づくしをした。「病者を扶くる心得」という一冊を著はし、人の臨終の際の種々の心得、祈りを教えたが、

右にあらはす条々を読み聞せて後は、幾度もヒイデス（信仰）たしかなれと云事、科の後悔、コンチリサン（Confissão（ポ）後悔）の心をもよほせと云事を思ひ出させ、言葉に叶はず共、心ばかりにてもゼズズ・マリヤを唱へよと勧め、守護のアンジヨ（Anjo（ポ）天使）を呼び奉り、折々バウチスモ（Bautismo（ポ、ラ）洗礼）の水をそそぐべし。ただしかやうの勧めも、病者のむつかしがり苦しまざるやうにすべし。はや極まると見えば、有合たるきりしたん衆、パアテル・ノウステル・アベマリヤ（Pater Noster（ラ）主の祈り）を唱へて、彼病者に御憐みを下されよとデウスを頼み奉るべし。如此致すにをみては、たとひ叶はざるによつてコンヒサン（Confissão（ポ）告白）を申さず共、デウスの御憐みを以て扶け玉ふべき也。

この様にてキリスト者たる為には死に対しても愈々全きそれとなることが求められる。きびしいことである。こ

して全クリスチャンをロヨラの反宗教改革運動の戦士としてそれにかりたてる体制がととのへられていった。キリスト者たることのきびしさについては次の様にも云う。

人の色身に命を与ゆるアニマ（魂）と云は、インモルタル（Immortal（ポ）不死の）とて、死し終る事なし。其アニマは残りにて色身を離るる端的に（するや否や）、デウス御糺明なされ、この世にてなしたる善悪によつて、賞罰おこなひ玉ふ事。

これは最後の審判の事であるうが、イエスが再臨し千年王国が出現。義人が復活し、サタンが獄につながれてキリストが平和の統治を行い、その後サタンとの戦争を経て一般人の復活があり、最後に審判が下されるといふ事をデウスの御業として宣明したものである。キリスト者たること甚だきびしい次第である。またつづいてザビエー・カソリシズムとして囚人に対し、成敗せらるる者の臨終の教化についてかく云う。

成敗に相伏したると知らせて後、其囚人に語るか、讀むかして、此事を教化すべし。

ただ今を最期と定め玉ふ事、デウスの御計らひなれば、のがるる所にあらざる間、即ちデウスの御定めに身をまかせ奉るべし。人間の身となり、一度死する事はのがれざる道なれば、以后何たる最期にかあはんと云儀を知らず、今如此覺悟たしかにして死する事は、かへつてかたじけなきデウスの御恩なりと思ひとりて、此死するを科送りの奉げ物とせば、其成敗は即科送り共、又は大きな功力共成事成。

これは法然の悪人成仏す、豈善人においておや、という教えと同じかとも思えるが、この方は罪人の死に対してそれはデウスの御恩召なのだから、という事でその運命をいって安らけき覺悟の程を教えるものであるう。何れにしてもザビエー・カソリシズムが宗教として死の問題を正面にとりあげていること、かくの如くであつた。

またギリシタンの葬儀の模様について次の如き記述がある。山口での葬送の次第であるが、トルレスが二百余人の信者をひきいてこれを取り行い、白法衣をつけた信徒が十字架上のキリスト像を先頭にかかげ、高い棺や明るい提灯を列ねて行列し、山口の町をねり歩いて墓地に到った、という。そして四日間の貧民に対する施与が行はれた。こうしたことが、ギリシタンの人々のみならず一般の庶民の人々に希有な事業として目をみはらせ、人々をザビエール・カソリシズムに引つけるたすけとなったことは疑いない。まだ一般にイエズス会士は葬儀を大事にし、死者を尊重して人々の同情をかった。会員が亡じた場合はミサを行い、死者の連祷を歌い乍ら、棺を会堂の中央に据え、四すみに四本の大蠟燭をたてて多数の信者が集まって厳肅な儀式を行った。棺を造ることも出来ない様な貧しい信者の場合でも人々の寄謝によつて棺を作り、それを絹布でおおい、富める人を葬る場合と全然同じような厳肅な儀式でこれを葬った。一般に日本庶民はこの様な取扱いを受ける事が稀であつた。この様な事が信者の間に連帯の強い意識を生じ、一般の人々をキリスト教に帰依さす強いよすがとなつた事は疑いない。これら葬列には三千人もの人が見物に集まつた。またキリスト教の種々の祭祀を通じて人々をそれに魅力的に親しませたことを前にふれたが、次の様な目をみはらす様な行事もあつた。

復活祭の前夜には、トルレスは非常に舞台効果の大きい方法を用いた。絵布その他のものをもつて荘嚴に飾りたてた祭壇、復活したキリストの像、火を点じた多数の蠟燭などを、初めは黒布で隠しておく。そして会堂の中央の小祭壇で、合唱隊の一部に唱わせながらミサを行う。それが終わるとトルレスは引こんでそつと服を変える。合唱隊がミサを唱いはじめる。「主よ憐れみ給へ」の章が終わると、トルレスが高らかに「高きにある神に栄光あれ」を唱い出し、合唱隊がそれに和する。その途端に黒布が切つて落とされ、荘嚴な祭壇が会衆の前に現出する（和辻哲郎、前掲

書）。こうなると信者の人々は魂を奪はれた様に感激するのであった。

これらは夫々の一例であるが、ザビエール・カソリシズムが日本の庶民に信仰の根をこここで定着させていったのは、勿論、カソリシズムの教えそのものが、「どちりいな」や「病者を扶ける話」による理解の普及のたまものであるが、こうして日本庶民がかつて知らざる、宣教師たちによる同胞的取扱ひ、カンパニーとしてお互いが夫々の集まりに受け与えた睦み合に心からよろこび賛同したことが大きな原因であった。そのことについて一章を設けて種々論じた次第である。人々は会堂につどい、キリストの像をかかげ、蠟燭をともしてもものの陰が黒くゆれるときミサを行い、オラシヨをとなえ、讃美歌をうたった。その会衆として、カンパニーとしての睦み合いの連帯感、満足感、これが日本切支丹を育成し、増加させた一大原因であった。

フランシス・ザビエールは、王からも誰からも凡そ選抜されることなき平凡なロヨラ一辺倒だけをとり柄とするクリスチャンであつたが、ポルトガルの日本植民地化の尖兵としてはじめてキリスト教を日本に持ちこんで日本に大きな騒動を起したことで大人物、英雄となつた。彼は偶然のたすけでマラッカに派遣されたが、そこでも人々に受け入れられず、僻地の伝道に追いやられる。しかしその後マラッカでヤジローなる日本人に会つて、日本に航行したのである。

彼はロヨラの反宗教改革精神にのつとつて日本に伝道するのでその教えはカソリシズムの中でも大反動であつた。それが当時の日本にはうつつけであつた。そこには故に欧州宗教改革、ドイツ農民戦争等にみられる進歩的近代的人間主義、神の国に実現するべき共和制、共產主義等の思想実行はその片鱗だに見出せなかつた。それについて種々

論じたのであるが、ザビエー・カソリシズムが、庶民をカンパニー、同胞として人間的にとり扱ったことにそれが見出せないかと云うことも議論にはなろうが、それはポルトガルの日本植民地化、日本総イエズス会派化という大野望の下に行はれたことであるから結論は否定的である。つまりイエズス会という植民地化の前衛戦闘集団がその新兵を養成する為の手段としてとられたのが、日本庶民の同胞化、カンパニー化政策であつた。そこには個人主義の何ものもなく、自由、平等、独立、友愛のどの様想もみいだせない。要は日本キリシタンの日本総キリスト教化の新戦闘集団育成の待望というもののみが働いていたにすぎなかつた。故にザビエー・カソリシズムの日本庶民の同胞化も決して進歩的なものではなかつたと云はなければならない。

第二部 大和朝廷と女王国（邪馬台国）

一、革命的クーデター大化改新

さてロヨラのジェスイット教団、ザビエーのカソリシズムは彼ら以後の発展については知らず、当時は大反動で、凡そ欧州宗教改革、ドイツ農民戦争にみられた近代化思潮、共和思想、共産主義思想等は何らその教義や実行の中に見出せなかつた。従つてザビエー・イエズス会を通じてはこれら反動と植民地主義以外の何らの発想も日本には伝はらなかつたと云はねばならない。このことを筆者は当論文第一部に於て欧州宗教改革、ドイツ農民戦争の検討を通じてそれなりに検証したのである。

しかし日本にはこれら進歩的思潮のあらはれに於てはザビエーやカソリシズムを待つ必要はなかった。

即ち日本には大化改新（六四五）という国家共産主義制度が堂々と一千三百五十五年前に現出していた。これは画期的なことであつた。その制度を簡約すると次の如くである。大化元年孝徳天皇をたてて行はれた政治大改革で、中大兄皇子（天智天皇）と中臣（藤原）鎌足等が断行した。

① 私有地、私民制の廃止、

② 国、郡、里制による行政権の朝廷集中、

③ 戸籍の作成や耕地の調査による班田收授法の実施、

④ 調、庸などの税制の統一等。

③の、班田收授法というのは、唐の均田法にならつたもので満六歳以上の男子に二段（約二千三百平方米、三万二千五百坪）女子にその三分の二、賤民のうち、官有の官戸・公奴婢は良民と同額、私有の奴および婢にそれぞれ良民の三分の一を基準とする口分田を授けて終身利益を許し、死ねば国家に収めることとした制度。六年毎に割換が行はれる。耕地面積は、三百六十歩一段、十段一町歩と定められていた。一段の田租は二束二把とされた。

①私有地、私民制の廃止。すべてを公地公民とすること。朝廷も子代、名代（こしろ、なしろ、皇族の為の私有民兵）をまず廃止、豪族の部（かきべ、私有民）、朝廷全体に隷属する品部（しなべ）等も廃止した。更に朝廷の直轄領である屯倉（みやけ、收穫した稻米を蓄積する倉）も廃止した。

②郡県制度の確立。大化改新後の律令制で、国家では国、郡、里の三段階に行政区劃を定め、国には国司（朝廷派遣の地方官、守、介、掾、目（さかん）の四段階あり）を置き、その役所を国衙、その所在地を国府と呼んだ。郡に

説

は郡司を置いた。その土地土地の国造クニノミヤツコ（国の御奴、世襲の地方官、一郡を領有した豪族）級のものを任命した。里には、現地の村落の有力者を里長とした。里は五〇戸で一里と画一的に編成した。

④租、地租、律令制の現物租税の一。口分田、位田（位階あるものの田、親王及び五位以上の臣）、職田（官吏の有職者が俸給として得る田、正当に退職すればその半分を賜わる）など私的用途を許した田から收穫の一部を現物納させたもの。田一段につき一束五把、即ち約三パーセントと定められた。租の大半は諸国に蓄積して正税と呼び毎年出挙（すいこ）して利稲を官費に使用した。出挙とは、官の行う場合は、毎年春に官稲を農民に貸付け、秋に三ゝ五割の利稲と共に回収した。営農資金であつた。

庸。律令制の現物納税の一。大化改新では仕丁しじやう（諸国から徴集され、中央官庁および封戸主である親王家、大臣家、寺社の雑用に従事した）、采女うねめ（古代、郡の少領以上の家族から選んで奉仕させた後宮の女官。律令制では水司、膳司に所属）の衣食用として一戸につき布一丈二尺、米五斗を納めさせた。

調。律令制の現物租税の一。大化改新では田の面積に應ずる田調と戸ごとの戸調とがあつた。七世紀末からは唐制にならつて成年男子の人頭税とし、織維製品、海産物、鉾産物など土地の産物を徴収した。分量は例えば麻布の場合には、一人当り二丈八尺であつた。

国家権力と共産主義

かかる微に入り細をうがつたしかも大層な行政制度が、大化改新で出現したということは、如何に既に当時日本国での天皇制権力が絶大のものであつたかを示すのに充分なものがあつた。すでにそれは大和朝廷に於て確立していた

のである。しかも大化改新の内容をみると、これは共産主義の思想とその実践である。

共産主義というものがどういうものか、それにはもとより明確な定義はない。大化改新、レーニンのボルシェビイキー、スターリンのソビエト・ロシア、カストロのキューバ、毛沢東以後の中国といったものの、即ち個々具体的な政治制度が共産主義と呼ばれるべきであろう。共産党宣言（Communist Manifest 1848）から共産主義の概念を考えてみるとそれは次の様になる。工業その他生産部門の経営を個々のブルジョアからとりあげて、これを全社会によって即ち共同の計算、計画によって行う。これには社会の全員が参加する。そしてこの目的を達する為に次のものを廃止する。競争、私的所有（私有財産）。すべてを協同行い、共同して生産、分配、消費を行う。これが共産主義社会である。言うところはよく理解出来るけれどこれは所謂共産主義の理想であつてこの様な共産主義は決して地上に全くあらはれなかった。この理想の共産主義と現実の地上に出現した共産主義との相異を明確に認識することがまことに重大なこととなる。

興味あるのはピサロとスペイン・コンキスタドルがペルーに入ったときのその国の社会制度である。共産主義の現実である。

帝国の領土は三種に分たれ、一は日神のもの、一は皇帝のもの、一は国民のものとされた。新しき征服の行はれる毎に、新領土は常に同一原則によつて三分された。日神の土地より上がる収入によつて、神殿の建立と保存、祭祀の執行、その他が行はれた。皇帝に属する土地よりの収入は、皇室費並に諸般の政費に充てられた。而して自余の土地は、国民各個に均分された。総てのペルー人は男子は二四歳、女子は一八歳に達すれば必ず結婚せねばならぬ。結婚と同時に、彼等の居住家屋が公費で建築され、生活に必要な土地が与へられ、子女の生れる毎に

これを加えた。土地分配は毎年更新せられ、家族数によつて増減された。国民は第一に日神の土地を耕し、次に老者、病者、寡婦、孤児、出征兵士の土地を耕し、其次に自己の土地を耕した。皇帝の土地は最後に集団で耕した。その他、ラマと呼ばれるペルーの羊は日神及び皇帝に属した。其毛は一定の時期に剪取られ、一旦官庫に収められた后、各家族に必要なだけ分配せられた。そして婦女子の手で紡ぎ且織られた。家族の為の紡織の後、皇帝の為の紡織が行はれた。

立派な共產主義である。そして大事な事はこれらはインカの強大な権力の下に実行されていた、ということである。新婚の夫婦に家屋を与へ、資金を給することは現在でもクウエート、その他で行はれていると言うが、こうした制度は社会主義の原則に則つたもので社会のあらゆる物品は、如何なるものでも個人一人の手で生産、分配されるものではなく、それらは社会全体の人々の力でそれらが行はれているという現実的考え方に基づき実行であつた。普通社会主義、共產主義の説明として前者は社会に於て各人の労働に應じて社会の富を分与される。後者は各人の欲するところに従つて社会の富を分与される、ととくが、これは右の考え方に基づく発想であつた。現在でも現実政治に右の考え方を根幹とする如き実行が行はれている。例えば、二〇〇〇年六月から南アフリカ、ジンバブエで黒人の元解放闘士らによる白人農場占拠が起つているが、これらは白人にもともと自分らのものであつた土地や家屋を収奪されたのでそれらを返還せよと叫んで暴動に走つていたのである。所謂白人の私的所有権を認めない、という思想がその根底に存する如くである。ブルジョア資本主義社会の現実法を破る実行である。しかしジンバブエではこれをその政権が暗黙に承認してその実行が行はれている（その後この直接行動はやんだ）。

理想の共產主義国家といはれたソ連邦も一九九一年、ゴルバチョフ（Mikhail S. Gorbachev）政権の下で解体して

そのスターリン (Iosif Vissarionovich Stalin) 共産主義が、実は途方もない強権の下に運営されていたことが、次々明るみに出た。即ちソホーズ、コルホーズ (sovkhoz' kolkhov' 国营農場、集団農場) 体制の下に農民を一所に集め強制労働に従事させていた。又工業でも国民をトラクターを用いる強制労働に駆りたてていた、等である。この為の犠牲二千万ともいはれ、その生産された余剰価値はすべて軍備にまわされて民需は殆んど無く、世界一の軍事国家となっていた。これが第二次世界大戦で最后、ドイツを破り、ベルリン一番のりを果して大いに世界の大向うをうならせ、スターリン共産主義の名が世界にとどろく原動力となった。しかしその裏にはこの権力を維持する為とられた手段が恐ろしき粛清というそれであり、最近明らかになった数字でみると、集団農場関係、八百万人の逮捕、うち銃殺三百万人、一九三四年二八〇万共産党員のうち百万人が逮捕、その三分の二が粛清。一九三四年第一七回党大会代議員一、九六六名のうち一、一〇八名の逮捕、処刑。一九三四年党中央委員会委員一三九名中一一〇名の自殺を含む処刑。その他逮捕、監禁、投獄数しれずと、恐ろしき数字が続々とズバリと並ぶのである。(Stalin as Revolutionary, 1879-1929 by R. C. Tucker, Norton, 1973. The Stalin Revolution, Foundations of Soviet Totalitarianism ed. R. V. Daniels, D. C. Heath & com., 1972) かくして一九三六年の超自由主義憲法にいろどられ、理想のパラダイスと云はれたスターリン共産主義も矢張り恐ろしき粛清を含む強権国家の強力支配の下に成立していたのであった。その上スターリンの粛清は軍部にも及び、トハチエフスキー (Tukhachevsky) 元帥を含む五元帥、五三軍団 (一軍団は二師団) 長、四艦隊司令官等が反逆罪の名で処刑され、陸海軍の指揮官、軍政治ワーカー等スターリンの手によって粛清されたものの数は総計八万二千名に達したといはれる。これは大戦中犠牲となった将校の二倍の数にものぼる。スターリンはこうして軍部を彼の支配下にあやつって使ったのであった (The Time of Stalin, Portrait of a Tyranny, A. A-Ovseyenko, Harper, 1980)。

共産主義国家と「家族、私有財産、国家の起源」

共産主義国家も強力な国家権力の下に生成されるものであることは右の例証によって明らかである。ここでそのことを強調したのは、意味がある。即ち共産主義体制は国家ではない、という極めて有力な主張が存して共産主義国家を否定しているからである。それは即ち国家権力というものは、社会に私有財産があらはれてはじめて出現するからであるというのである。私有財産があらはれて、はじめてこれを守る必要からそれを所有する者達が国家を生成する。それで国家が出来た。共産主義社会には国家はないのだという主張である。これは勿論国家以前の原始共産主義社会の存在を想定している。ここから二つのことが考えられる。第一は、共産主義社会体制は国家権力の無い実に融通自由の樂園であり、ここにこそ人類が生活し、生を享受する意義があるのである。こういう樂園的社会にすべての人々は生活しようではないか、ということであり、そのすすめである。エデンの園、極楽浄土、桃源郷、共産主義社会といった考え方の連鎖で共産主義社会の現実的美化をはからうものである。第二は、こういう共産主義社会に生きる為には、現在の生活から原初生活の態様にもどらなければならない。それを妨げているものは、おわかりでしょう、国家である。国家はこの意味から諸悪の根源であり、人類破滅の元凶である。これを無くし、これが死守している私有財産をとりはらへば玲瓏^{ワカモロカ}と明らかな理想の人類社会（共産主義社会）が出現する。即ちこの国家を倒し、これを無くしようという国家転覆の革命的すすめである。これを主張しているのが、エンゲルス（Friedrich Engels）の「家族、私有財産、国家の起源」（岩波文庫、戸原四郎訳、一九九三年）なる書物であった。

つまり、簡約すると共産主義社会は人類理想の樂園的なそれであり、極楽や桃源郷が、そのまま実現する社会であ

る。人類はすべからくここに生きなければならぬ、しかしそれを妨げているもの、その実現を阻止するものがある、それが現今のブルジョア国家である。共産主義社会を実現生成する為にこれを妨害しているもの即ちブルジョア国家の存在も放置してはならない。人類の為にこれを覆滅さそう。人類の幸福の為に全人類が結束してこの目的をめざして立上ろう、と云うのであった。

エンゲルスの同書は、原始共産主義社会を集團婚のそれをもつて基礎づける。即ち兎の部落と亀の部落が集團婚で結合している。この二つが結婚して、兎の部落の女性はすべて亀の部落のすべての男性の妻である。その逆も同様である。生れた子供は夫々のすべての女性の下に子となる。子は母だけしか知らず、母も子しか知らない。この関係に男性の介入する余地はない、というものであった。この社会規範を基礎としてすべての社会活動が共産主義的に行はれた。ところが生産力の増強によつて所有が増大し、これが私有財産をうみ、その発展のゆきつくところはこれら私有財産を確立防衛する為の法規範が生れこれを守る強力な権力機構が生成された。それが国家である、と説く。この理論がモルガン (Lewis Henry Morgan) の「古代社会」からつくられたとか、この原始共産主義社会が果して存在したのかどうかをめぐつて肯定、否定がとびかつたとかは、しばらく措くとして、その実体の解明證明は不可能としても、この書物の与えた影響は―特に日本左翼陣営に対して―甚だ強大であつた。平成の今日にいたるも共産主義社会を無国家の社会と規定する日本人はまことに多い。ここからものごとの理解研究が大いにとどこおっている。

結論からいうとエンゲルスの「家族、私有財産、国家の起源」はテーゼ（主張）であつてセオリー（客観的理論）ではない、ということである。それが大事であり、その区別がはつきりしなければならない。ここを明確にしなければ

ばならない。この明確さが無いものが研究、解釈とも甚だ複雑難解となる。エンゲルスの同書は、共産主義のすすめであるにすぎない。所謂御得意の純粋科学的社会主義理論の一片のカケラもそこにはない。レーニン(Vladimir Ilyich Ulyanov Lenin)の膨大な著作が殆んどテーゼであつた様に、また法学論集四七号所載のエンゲルス、「ドイツ農民戦争」もそうであつた様に、この「家族、私有財産、国家の起源」もそうなのである。

西欧に於ては「同書」の取扱いは日本と甚だ異なる。マルクス・エンゲルス選集の一つはその内容中に同書を取りあげてはいるけれどもそれは僅々二頁分の紹介でかたづけられている。その紹介は要するに次の如きものである。即ち国家のない社会は種々存在した。ある経済的發展段階で社会に階級分裂が起り、国家が生じた。我々はいまこれを消去する段階にきている。この消去なければ生産がとどこおるのである。階級が消滅すれば国家も消滅する。それはそれが生成された必然を以て今日消滅の必然に直面している。その後には自由平等の基礎で生産者が活動する組織だけが出現する。国家そのものは紡織機とブロンズの斧にならべられて博物館の古代遺蹟室に陳列される、と (Marx & Engels Basic writings on Politics and philosophy, ed. L. S. Feuer, Anchor, 1983)。「家族、私有財産、国家の起源」をその本質上、正當に評価し、扱つたものであらう。

共産主義国家大化の改新

西欧に於けるエンゲルスの同書(エンゲルス、「家族、私有財産、国家の起源」、以下この様に表現する)の扱いはいま瞥見した如き様想であるが、日本に於てはその威力は依然消しがたい。即ち原始共産主義—国家—共産主義社会といった図式が、左翼系のみならず人々の頭にこびりついている。エンゲルスの偉大さである。つまり、マルクス、

エンゲルスを何かにつけて聖域化してその言説を尊重し、それと反する言説をさけるのである。批判も判断力もあつたものではない。エンゲルスの同書はその役割をレーニン・ボルシェビキ革命の成功で一応そのテーゼとしての役目を終えているのだが、その後遺症はなかなか根強い、ということである。結論をさきに、この間の経緯を一言で片づけると、即ち共産主義国家はないということになるのである。国家がある限りはそれは共産主義ではないということなのである。まことに簡単である。これには大化の改新の班田収授法、唐制均田法、スターリン共産主義国家等の問題がからんでくるが、これも結論をさきにのべると共産主義国家はない、というのは大嘘で、大化の改新の諸政策とその立法はかくれもない、国家強権下の共産主義（共産主義国家）である、という主張になるということなのである。そこでまず大化改新の国家社会制の性格を一瞥する（これはさきにとりあげている）。

法学論集四五号—四七号に取扱つた大化改新よりおくれること八八〇年后に起つたドイツ農民戦争の共産主義思想、急進的ブルジョア思想から共産主義思想と目されるものを抽出すると次の如くなる。これはエンゲルス、レーニン等のテーゼよりより具体的であると考えられる。

一 割税の廃止、貧者の税金の廃止、農奴課税の廃止。

神に仕える者としてすべてそれに施す如く他人に施せ。

自由と平等が支配する。

プリンスや大公達は新しき福音になじまない。従つて彼等は覆滅されねばならぬ。庶民は福音を信奉し、従つて彼等は尊重される。

神の国の市民とならぬ者は追放され、また殺されねばならぬ。

内なる光の目覺めをさまたげるものこそは富である。従つて神の國に於ては、私有の富は存在してはならぬ。あらゆるものは共同で所有されねばならない。

各税、各レンタル料は廢される。一割税は徴収されるが、それは改革教会と貧民のためにのみ費消される。鉾山の全国共同所有、道路、航路、橋、河川は公に管理され、それらに外敵防禦施策がほどこされる。

右がドイツ農民戰爭に示された、共和思想、共產思想の概畧であるが、大化の改新については本論稿のさきに示した如くであるので、ここにはくりかえさない。

大化の改新のうちの條項がドイツ農民戰爭のどの條項に相応ずるかも細部に於ては、中々にむつかしい問題をはらんでいると思うが、全体に大化改新が、天皇の下に全国の土地を国有化してこれを公地とし、人々をも公民として、且國、郡、里制の下に行政權を中央、地方共に朝廷に集中して私有地、私有民を廢する原則の下に運用しようとしたこと。その根本に班田收授法を採用実施したこと、これが律令制にひきつがれていったことなどは、大いに共產主義思想の發現、実施であつた。平等思想の採用、貧者への施策は部曲民の廢止等にはあらはれていて、その反面プリンスや大公達の覆滅は大化改新が蘇我氏誅滅から起っていることから当然の变革が期待されたこと等、どれをとつても大化改新は立派な共產主義思想の實現されたものであり、これを共產主義國家の施策と呼ばないのは、呼ばないほうが余程何かにとらはれてものごとの本質、眞実を直視しようとしめない態度だと云えよう（理想としての共產主義が國家權力下に實現されていた）。

さきにみた反宗教改革のカソリシズム・ドチリイナ・クリシタンは、ただ人類の受難を一身に引受けてクルスの死を遂げたイエス・キリストに祈りをささげ、身をつつしみ、かしこみて只管イエズス会に忠節であれ、と説くだけで、

その点は日本で誤解されているが、その実、ただ一片の自由平等独立の精神もない。この大化の改新の班田収授法や唐の均田法といった人類共産の思想が千五百年もそれ以上も前に東洋で発現実施されていた事は、それ自身、その点で西欧をしりえに瞠若たらしめる光りかがやく現象でなければならない。これについては后にふれる。ちなみに唐の均田法が毛沢東中国共産思想の源流か、といった問題を考えるのも故なしとしないであろう。

これだけ明々白々の班田収授法を共産主義といはないのは一つには皇国史観の影響で、当時大化改新を共産主義国家などと言おうものなら学者生命はおろか生命まで危険に瀕しかねないことがあったからと、その上エンゲルスに惑わされてテーゼをセオリーと見誤ったこと等がその原因である（後者については屢々のべた）。しかし大化の改新は滅他に共産主義と呼ばないけれど、スターリン強権国家共産主義は、三六年憲法のそれも、戦後のそれも共産主義と呼ばないことではないという日本にはおおいがたい不一致があるのは何と理解すべきか。

とまれここに憐れをとどめるのは、日本原始共産体の研究でこの研究は大化改新の班田収授法を原始共産主義と呼びたい、呼ばねばならぬのだが、右にあげた制約の為、またこれが現れた年代も一九三〇年で治安維持法（一九二五）の頃の事でもあった為、これをそう呼ばず、大化改新以前に存在した日本原始共産体なる社会現象を考え出してこれで筋道をとおそうとした。即ち大化改新が大へんスムーズに班田収授法となったのは、その以前にこれと似た社会現象があった為であるというのである。つまりすでに日本には共産主義体制があったから大化改新の班田収授法という共産主義が人々の反対も受けずにせいせいと実施されたのである、と主張するのである。この説はつまり班田収授法を共産主義と呼ぶため一つの仮託をもうけて一ヒネリし、その主張を通そうとした学問的謀りごとであったと云えようか。それはそれで大へん結構で、興味があるが、この原始共産体（国家とは絶対言はない）が、日本に存在した

かどうかという議論が、これは明らかにエンゲルス・同書の影響で、大層華々しく展開された。これに色々の学者が参加して肯定論、否定論にわかれてやり合った。まことに何というか、何ともいえない。つまり論評の限りではないが、ちなみに云えば、日本に国家権力無き共產体制があつたか、なかつたかということ、筆者に云わせれば、有史はるか、はるか以前、土地広大で人すくなく、人々が自然の事物とたたかい乍ら相より相たすけ、かつかつの食物しかつくるか、とれるかしかなかつたとき以外、所謂国家権力なき共產体制はなかつたということである。へ馬に寝て残夢月遠し茶の煙、では無いが、時代をへだててものをみることに、三次元の間人が二次元の人々をみることに相似たるか（日本原始共產體の研究、細川龜市、白揚社、昭和六年（一九三二））。

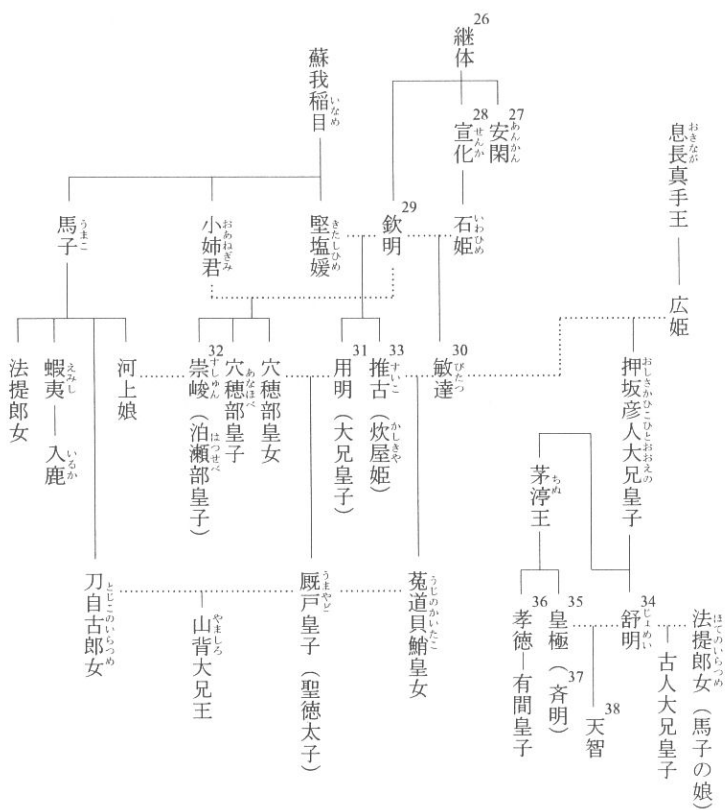
蘇我氏の篡奪

ある筈もない日本原始共產體（国家ではない）が存在したか否かの議論が、多数の学者をまきこんで華々しく展開されたことは、時代のせいでもあるが、大化改新共產主義は蘇我氏の国家篡奪の大逆から発した。

蘇我氏が七世紀日本で威勢を振つた豪族であつたことはかくれもない事実であるが、これが天皇家をおいこんであはや蘇我氏天皇が出現しようとする。これには仏教伝来というロマンに満ちた壮大な物語がその前駆をなし、これからは神仏二教の争いと蘇我、物部氏の争闘が結果する（これについては稿を改めて考察を加える）。この争闘に勝利をおさめ、大連物部守屋を亡ぼした（五八七）蘇我氏は仏教を以て国政の基とし、仏教王国をたてて自ら天皇の位を覬覦（分不相応なことをうかがいねらうこと）せんとする。仏教立国をはかる政権は、日本に於ては奈良朝、徳川政権とつづくが天皇の位をうかがうかまたはそれと同等の権勢をはろうとしたのは蘇我氏のみであつた。蘇我氏の皇室との

皇室と蘇我氏の関係系図

太字は天皇、数字は
皇統譜による即位順



蘇我馬子、物部守屋を滅し、崇峻天皇（蘇我の稲目の娘、小姉君欽明天皇妃の王子）を暗殺した（直接の下手人は東漢の駒）。

蘇我の蝦夷^{えみし}、馬子の息、自己の墓をつくつて陵（ミササギ、天皇、皇后、皇太后、大皇太后の墓を意味する）と呼稱し、息入鹿に紫冠（皇室のみが与えられる）を授けて大臣に擬した。

蘇我の入鹿、蝦夷の息、通称は鞍作、山背大兄王（聖徳太子と馬子の娘刀自子古郎女との間に誕生した王子）を攻め亡ぼしてその妻子眷属を尽殺した。後その家を宮門、その男子、娘を王子・女と稱した。

この蘇我氏の勢力が入鹿を以て急速に高まり、天皇家に害を加え、日本の国体（主権または統治権の所在により區別した国家体制）を变革、ほしいままにせんとした徴候明らかとなつて、ここに大化の改新がこれを阻止すべく勃発したのであつた。蘇我の入鹿の思惑は、一つには仏教という東アジア伝来の強力宗教を背景のたのみとして人心をとらえ、民衆のこれによる支配を確立して天皇家と神道を圧迫し、これに代ろうとしたものと推測出来る。これを適格に判断し、瞬時に事を成就したのは、中大兄皇子と中臣（藤原）の鎌足であつた。時に皇子一九歳、鎌足三一歳であつた。若々しい力が日本の政治を变革しようとする、新時代の到来であつた。このとき臨座していた天皇皇極はこゝういつた、と日本書紀に誌す。

「知らず、作る所、何事ありつるや」

これに答えて中大兄皇子は

鞍作^{くらつくり} 天京^{あまき}を尽くし滅して、日位^{ひつぎ}を傾けむとす。豈^{あに}天孫を以て鞍作に代へむとや

この問答がすべてをものがたつてゐる。事件の経過上これを疑うすべはない。しかしこれにつきこの問答は嘘言で

あり、大化改新は、皇極女帝が遂行したものであり、中大兄皇子は名前だけでこれに関係していたにすぎないとする説がある。冗長でわざわざとりあげることもないかとも思うが、青史を正史とする為敢えて一言を加える。

一、皇極女帝は蘇我石川麻呂や入鹿とよしみを通じ、石川麻呂と中大兄の同盟をはかった、という。また入鹿と親しくして山背大兄王を殺害し（六四三年十一月）、その入鹿自身も大化改新で殺害し（六四五年六月二日）、その他、古人大兄王、有間王子等を殺害した、という。恐ろしい謀略家で、事実とすればこの様な女帝は、古今東西青史に比すべきものは無いであろう。しかし皇極女帝の在位期間は六四二年正月一五日から六四五年六月一日と決して長期ではない。まず大体右の諸謀略と時間があはないのである。皇極女帝は入鹿の山背王兄王の殺害計画を知っていてこれに乗った、というが、少くともこれはそれを示唆したか、何らかの暗黙の諒解を入鹿に与えたか、を意味するのであろう。そのどちらにしてももしそうとすればその一年半后にどうしてその入鹿を太極殿の一二の門をしめさせて殺害することが出来たのであろうか。入鹿は皇極女帝にそれ程たぶらかされていたのであろうか。それにしてもその殺害の二日后に皇極女帝は孝徳天皇に譲位している。入鹿を殺害して二日后に何故皇位をゆずるのか、何故そんなプロテクターをはずす様な危険を敢行するのか、そんな事が常識的に考えて出来るのであろうか。おかしい話である。

また、たとえば皇極女帝が蘇我石川麻呂と中大兄皇子を、少くとも六四三年以前に同盟させたというが、もしそうであれば、中大兄皇子は一七歳より若いときである筈で、そんな同盟が果して可能であったのだろうか。石川麻呂が高校生の様な人に近づくのであろうか。もしそれ以前から皇極女帝と石川麻呂が政治的にしる接近していたとすれば、皇極女帝は即位以前は舒明天皇の配偶で宝皇女（アトヨタカライカシヒタラシヒメ天豊財重日足姫）であつた（舒明天皇崩御六四一年一〇月九日）のだから皇后と豪族の接近が当時果してどんな形で可能であつたのだろうか、豪族が天皇の皇后にどんな形でどんな風

に接近していたのであろうか。当時でも何時でも、夫たる天皇をさしおいて皇后に政治的に接近する人が果して存在し得るのか。また大化改新后皇極女帝は、それが最大の目的であったという中大兄皇子の皇太子就位を勸説したという。自らは六四五年六月一四日に讓位して孝德天皇がたっているのに、太上天皇（實際は持統天皇六九七年以后この名稱がある）がそんな大事に口出し出来たのであろうか、皇極女帝謀略クーデター説は大へんいかがわしい主張である。

皇極女帝が賢明なしっかりした人格であったことに疑いはない。彼女は舒明天皇とは再婚であるが、舒明天皇の宮に仕えていて、みいだされて皇后となった（六三〇年一月一二日）。そして舒明天皇の崩御（六四一年一〇月九日）と共に推されてスナナリと皇極天皇（六四二年正月一五日）となった。この女帝は六四五年六月一四日、即ち大化改新二日后に孝德天皇に讓位したが、六五四年一〇月一〇日、孝德天皇の崩御と共に、再び天位につき齋明天皇となった（六五五年正月三日）。重祚のはじめである（他には孝謙天皇（女帝）——称德天皇を数えるのみ）。この経歴をみても、よく周囲にとけこみ、融和型で大化改新という日本の激動をその主謀者天智天皇の母として有用に生きたことがわかる。彼女が排除的、謀略型の人格であつたらこういう生涯を送ることはまずなかつたであろう。彼女の賢明はこういった形で発揮された、と理解しなければならぬ。ちなみに言えば、皇極天皇、齋明天皇はその息英傑中大兄皇子あつてのことで、その逆では決してなかつた。

最後に皇極女帝謀略説のいま一つの根據とする主張がある。これがこの主張の有力なベースとなっている。それは中大兄皇子は、傀儡にすぎず、皇極女帝が傀儡師であつたというものである。そしてその證據は、女帝没后（六六一年七月二四日崩御）天智天皇は最大の政敵天武天皇（天智天皇と同じく皇極女帝の息、実弟大海人皇子）を何とも処

分し得なかつたことでこれが天智天皇は母がいなかつたら何も出来なかつた最大、有力な證據である、というのである。しかしこの主張も無理がある。天智は老いたのである（年齢は四六歳だがその公私にわたる絶倫の活動の爲（配偶は妻妾一〇名を超える）老いた。また年齢感覺は平成とは根本的に異なる）。麒麟も老ゆれば驚馬におとる、という運命を英傑天智天皇もまた免れ得なかつた。かかる例は歴史上枚舉にいとまない。豊臣秀吉も賤ヶ岳七本槍の彼と晩年、秀次に死を賜い、あまつさえその妻妾三六名を六條河原で斬殺し、また千利休にわけもなき切腹を命じる彼とは両者の間天地の差がある。フランス・ナポレオン三世も一八五九年七月、イタリア独立戦争に勝利を収め、我が開放者、救済者の蒼穹にこだまする叫びを背景に、ミランに入つたときの彼と一八七〇年九月、普仏戦争に破れて一〇万四千の精兵と共にビスマルクの捕虜となつた彼とはまさに雲泥の相異がある。そのビスマルクにしても、一八七一年ドイツ統一を完成しながら一八九五年、八〇歳の誕生日に名譽（Wohldollen）を送られんとして果さなかつた。議會がこれを否決したのである。その他山縣有朋、ウィルソン米大統領（President W. Wilson）、スペイン・フランコ將軍（General B. F. Franco）等々の厄を蒙つた英雄はあまりにも多い。以上を悲劇というや單なる成りゆきと断ずるや、人これを以て如何となす。

天智天皇は、はじめ子息の大友皇子を後継とする計画ではなかった。それは皇子の出自による。彼の母は宅子郎女ヤシノノメといひ、伊賀国出身の采女にすぎなかった。有史何千年身分制度は不変だが、こうした国家体制ではこの差別は体制そのものであった。しかるに晩年に急に親子の情愛にひかれて天皇没年の一〇月に皇子を皇太子としたのであった。そしてそのまま同年一二月三日崩御するのである。まさしく秀吉の愚が、一千年も昔に行はれていた。最初皇太子に擬せられていた大海人皇子は、この変化に驚き、皇権覬覦の何らなきことを誓言して吉野にのがれた。天智天皇にし

てみれば、彼を吉野にしりぞけたのであった。そしてその半年後に壬申の乱が勃発し、天智天皇崩御の二日后、六十七年二月五日緊急に即位した弘文天皇と対決、これを亡ぼした。弘文天皇が敗戦の中とらえられたのは、千年後に起る関ヶ原の乱で、大谷刑部の陣所となつた場所にそう裏山である。大海人軍と弘文天皇軍の激闘はその下を流れる小川を血でそめ、地元の人々は以来これを黒血川と呼んでいる。弘文天皇処刑の場は、山林の中、数本の樹木にかこまれた晝なおくらしい地点で、現在は白い柵が施してある。暗く淋しい場所であつた（筆者は先年同地を訪れた。地元の言い伝えはタクシー・ドライバーが教えてくれた）。

かくこのときの情勢をみれば、天智天皇の最後のとしの行動は残念乍ら首尾一貫していない。しかも大友皇子に皇位禪譲のこともなく没している。天智天皇も大化改新を断行し、律令制への訣別の整備に苦心し、大陸経営に於ては成功せず、遂に白村江で大敗してそのアト始末に狂奔。唐、新羅連合軍の日本進攻を恐れて、西国から近畿まで皆と狼火を築き、近江に遷都し、百済の難民を種々救済する等生涯、大活躍をしたが、老齡遂にみた如き結末となり、それが、壬申の大乱を起すよすがともなつて帝の最も恐れ、忌避する事態を招いてしまったのであつた。老齡英心を蝕むこと天智天皇にしくはない。皇極天皇こそはこの天智天皇の傀儡であつた。

国家Ⅱ起源、機能、制度

ここで国家の成りたち、制度、機能について一言したい。

国家の起るのはまず第一に武力である。その次はこれを駆使する人物（英雄）である。そしてこの両者が相まって、部下を集め、戦争、革命等によって国家をたてるのである。平成の日本では国家は選挙によって国民全般から選ばれ、

投票の最多のものが政府を構成する。かくすべては平和的に行はれ、政府は国民全般の意思に基いて存立している。平成日本ではこれを歴史学に於て古代国家にも当はめ、古代国家は人民全般の意思に基いて存立しているとする。武力のことは大して問題としない。しかしこれは大きな誤りである。平成日本にも陸海空約二五万人の軍隊があり、また国家は国民全般の意思に基くというが、それが国家のポリテイ、この場合は資本制独立国家のそれであるがこれを脅かすか、これを変改しようとした場合は、主権が発動して国民全般の意志を無視してこれを弾圧、解消さす。日本でも太平洋戦争后、米軍日本占領中種々の追放が政官財界に行はれたが、一九四七年二月一日には資本主義の危機と目されたゼネストが産別、総同盟、日農、社会党左派によつて遂行されようとし、前日これは中止された。さらに言えば一九五〇年六月六日、共産党中央委員二四名全員が政府転覆危険を名として追放され、資本制社会維持の態度が戦后混沌の中で鮮明され、ここを以て共産党は地下潜行におこまれた。この追放で共産党内部に分裂が起り、党大会さえも解消された。この年同月二五日に朝鮮戦争が勃発、七月八日、警察予備隊七万五千人が創設された（これは一九五二年七月三十一日、保安隊に改組、一九五四年七月一日自衛隊となる）。これらはみな日本政党政治の枠外で主権の行使として実行された。そしてすべては国家が武力第一であることを明白に物語っている。

国家の目的は何かというそれは国内的には国民の支配であり、それは武力に基いているが、この支配の枠からはみ出したものは容赦なく弾圧するか、抹殺する。人民の自由、平等、独立、友愛はこの枠の中の話である。

第二の国家目的は国内の秩序安寧の組織的維持防護である。これは説明を要しない。国外的な国家の目的は何かというとな国家の安全の確保と国家の発展、領土の拡大である。このことは二度の世界大戦による無数の犠牲の上に国際連盟、国際連合を組織発展させた世界に於て漸くすべての国際問題を談合によつて解決しようという気運が生れたが

その歩みは遅々として何れの国も武力を放棄しようとは絶対しないし、軍縮会議はすすまない。国家の対外的目的は国家の防衛と領土の拡大である根本原則はかはらない。そのベースは武力である。人類はその発生以来武器文化を休むことなく育んできた。槍から原子兵器まで。

ちなみに言えば、英仏米革命を通じて「民族自決主義 (self-determination)」原則が世界に流布した。その根本概念は国民は国家の臣民ではなく、その主権者であり、彼等自身みずからの国家形成をはからう。国家支配の正当性 (legitimacy of rule) は被治者の同意に依據している、という主張がウイルソン主義の大原則として世界に展開された。これが近代国家のめざすものであり。国際連盟、国際連合運営の根本原則であるとされた。それもとよりそうであり、何人もこれを否定しない。し得ない。しかし両国際機関の現実はいま右にふれた如くであり、この觀念の適用は、これを国家社会の到達すべき目標であり、これを現実化することが要請されるというものである。ここで重大なことはこれは国家もしくは国際機関の現状を分析したものではない、ということである。科学的分析に於てはこの点を見誤ってはならない。

各国家は各憲法にこの原則をかがけて努力しているが、これは国家の理念であつて、この原則を国家の現状分析に用いてはならない。これが重要なことである。ましてやこれを分析の原則として古代国家に当はめることは大きな誤りを生む。心すべきである。

更にちなみに言えば、三六年憲法をもつて理想の国家として色づけられ当時世界渴仰的であつたスターリン・ソビエト国家は、下からの国家組織を成文化し、ソビエト (會議) システムと共産党會議システムの二本だてを柱として前者は村落 (selo) 地域 (krai) 地方 (oblast) ソビエトを夫々下から選出し、後者は都市、地方、国家共産党會議

を同じく夫々下から選出し、共和国ソビエト会議、全連邦党会議を構成して、人民の意思がここで決定され、実行されるとしたが、これは憲法紙上のことで、その実は、これら会議体に夫々共産党細胞が入りこんで必要な監督、指導組織化を行い、国家最高権力には誰からも任命されない政治局（Permanent politburo）があつて（初期のそれは次の如し。Lenin, L. B. Kamenev, L. Trotsky, Stalin, G. E. Zinoviev, A. L. Rykov）それがソビエト国家を運営したのであつた。この事実が世界の現実であり、ソビエト・システムを日本古代国家の組織運営に下からの権力支持構造に当はめてこれと見誤つてはならない。

臣、姓、連、大連、大臣、県主、国造、首、品部等みな夫々の日本の地方に生じ、朝廷の任命であつた。これらがお互い、会議制でどうして貴公は何、おのれは何、誰は何という風にきめられるものか。これらはすべて地方の豪族、有力者として存在していたが、これが会議制で朝廷を選擧の第一党の如くささえたのではなく、その現実在即して朝廷から任命され、朝廷に従つたのである。そのベースは朝廷の武力であり、これを動かす朝廷ポリテイの力であつた。大海人軍に地方の有力者が加わつたのは、これら豪族が下からの合議で大海人皇子を選出したのではなく、次期天皇としての皇子の軍に参軍したのであり、大海人皇子の命令に従つて既に強力な力をもつていた大友朝廷軍と対決する為であつた。この場合の内乱の眞底は賭である。尚大化改新以前、日本は奴隸制国家であり、子代、名代、部曲、民部があつた。奴隸制が征服と支配によらず、合議と話し合いで、どうして出来ると主張出来るのか、話し合いと合議によつて我が一族は奴隸となりましようとなつたのだと主張する向きはどこにも存在しないであらう。もしそんなものがあつたらそれは噴飯のたわごとである。

一、日本古代国家論

疑書魏志倭人伝

ここで、魏志倭人伝、古事記、日本書紀等の解析による日本古代国家論にふれておかねばならない。

日本古代国家の研究につきその数多の資史料の中、双壁と目されるのは古事記、日本書紀であるが、戦后その研究の陰はうすくなって、代りに魏志倭人伝の研究（晋の陳寿撰、魏の史書、彼の編した三国史は、「魏書」三〇卷、本記四卷、列伝二六卷、「蜀書」一五卷、「吳書」二〇卷、計六五卷。一般に魏志倭人伝と稱されるのは「三国史魏書」の卷三十「烏丸、鮮婢、東夷伝」の中の倭人の條のことである。その字数二千二百字余り、菅谷史則）が盛んとなった。これは一種の史書ブームで、専門家、学者、文人、ジャーナリズム、素人が加つて大きな騒動をまき起した。そのよつてきたる所以のものは、

一、一般的にはこの書、目新しいこと。

一、日本三、四世紀頃の社会経済的分析が主となつていて、記紀等の記述とは異なり、田耕、芋麻、蚕桑栽培、米穀売買、織布、漁撈、風俗、倫理等の描写があり、日本が大小のくににわかれていたこととその間の里程、その各々の戸数、行政、軍事（矛、盾、弓）等の記述があつて近代社会科学研究の対象となるものであると考えられたこと。

一、倭国は伽耶国（加羅）から人々が北九州にわたつて建国したものと説がある方面で行われていて、その点、魏が倭国を認めていることは、それへの有力な反論となること。

一、何といつても全文二千二百字余り、普通書物の二・五頁から三頁迄の資料であるから何人も容易に研究と稱す

るものに参入可能なこと。以上であると考えられる。

とにかくこの倭人伝は現存古資料のうち日本関係最古のもので、しかもその描写方法論は社会科学的ときているからその価値は最高のものと人々から折紙がつけられる。しかし問題はこの研究が主としてその中の邪馬台国のそれに向けられ、その存在の畿内説、九州説が入り乱れて、尚それに三角縁神獣鏡の性格と分布論が点綴して論争猖獗し、いつはてるともわがちがたい。

一般論として日本古代国家論にも研究のすみわけが発達していて、邪馬台国、記紀、伽耶・任那と大ざっぱに分類され、夫々の固有名詞の下に班という字を当はめれば、事態はよくわかる如くである。この三分野に相互交流、依存関係はない。同じ日本古代国家を研究対象としているが、一は、日本国家を四角といい、一は、三角といい、他は円といている。これらの研究を総合発達さす為には、ここにも運動ゲームと同様総監督の存在が必要であろうか。魏志倭人伝、僅々三頁足らずの資料であるからその価値は最高としても往昔からこれについての疑義がたえない。それを要約すると、新井白石はこれを研究し「古史通或問」で「魏志」倭人伝の里程記事を分析すると共に地名の古昔を比較して「邪馬台国は即今の大和国なり」という結論に到達し、卑弥呼を「神功皇后の御事」とみなしていたが、後に自説を改変して邪馬台国九州説の首唱者となった。ややおくれて本居宣長は邪馬台国を九州の一国であり、卑弥呼は九州の筑紫一帯にあった熊襲^{クマシ}の聚落の女酋であった、と主張した。その他あげると伴信友は邪馬台国畿内説（汪向榮論文）、幕末の水戸学の菅政友は「魏志倭人伝」を内容「イトイトミダリナル事多カレド、中ニ人サモアラント思ハルル事ノ無キニシモアラズ」と評している（黒田幹一）、という。更に白鳥庫吉と内藤湖南は、「魏志倭人伝」の里程表は誤りで例えば陸行一月は陸行一日の誤り、とし又方角も九〇度違っている（汪向榮）、としている、という。し

かしこの「魏志倭人伝」疑義説の圧巻は、これがオリジナルなものと後に改訂補筆されているものと二つあり、前者には邪馬台国の名も内容説明もなかった。それは後者の補筆によるものだ、という指摘である。オリジナルは陳寿として、これに補筆註解を施したのは、南北朝末の裴松之^{ハイシヨウシ}であるとし、その註解は「文帝」の勅命によったという。後者の誤りは次の様に要約出来よう。

一、この誤り指摘の根幹は邪馬台国は大和のことであり、中国で大和朝廷がその存在を知られるのは、五世紀のことで（仁徳天皇が四一三年に使を中国に遣してはじめて大和朝廷の事が中国に知れた）、陳寿の「魏志倭人伝」を撰した二八五年にはやまとの名は全く中国に知られていなかった、というにある。

一、陳寿は帯方郡から沔岐対馬を経て未盧国（松浦郡）、伊都国、女王国、狗奴国という風に里程と共にぐにぐの名を誌しているが、その中で、女王がたつまでの間女王国とその北方のぐにぐに大乱がくりかえされぬ様に、そのおさを伊都国においた。陳寿はこれを倭と呼んだ。ところが裴松之はこれらを誤解して伊都国を女王国と誤り、倭と女王国を邪馬台国と稱した。これは間違いであり、これで大変な混乱が起った、としている（黒田幹一）。

一、尚、裴松之は、日本に全くなかった風俗、鯨面（顔面の入れ墨）、文身（身体への入れ墨）をそれとなし、これが日本にあったと「前漢書」地理志奥地の南蛮の記事をとって記述している。大きな誤りである、と主張している。

これ位疑義やまた誤りと稱するものが云々される限り、「魏志倭人伝」は疑書、又は偽書といはなければならず、普通ならこれは史資料的価値を失ってしまうものなのだが、こればかりはそうはならず、依然第一級資料の価値を損ずるところはない。きらきらとその存在を誇っている。ちなみに、陳寿も女王国の存在を認めているのだから、邪馬台国を女王国という名稱にかえてみればどうか、という女王国九州説、女王国畿内説となつてピンとこず、矢張りこ

れは意味も違ってきてサマにならない様である。

聖書と古事記

「魏志倭人伝」は概畧右に一瞥した如きものであるが、ここで、これと同時代の日本古代国家を取扱っている古事記、日本書紀によつて日本のそれを究明することを試みたい。ここでは古事記をとりあげる。

古事記というのはまことにスケールの大きな視野をもつた労作でその構成は天地創造からはじまり史実と稗史を織りまぜた希有にすぐれた書物であり、その規模、視点は優にキリスト教聖書に匹敵する。聖書は人のよく知る如く Creation から始まり、Cain & Abel、Exodus from Egyptそして Moses の種々の物語り、Ten Commandments、キリストの説話、その誕生、Sermon of the Mount、Crucifixion、Paul's Journey 等々の史実と Noah & the Ark、Tower of Babel、Samson & Delilah 等の壮大な稗史をないまぜにした一篇の叙事誌、抒情誌であるが、古事記も天地創造からとき起し、倭の出雲国征服、神武東征、各天皇紀、小碓命（日本武尊）の事蹟、天日矛の渡来、仁徳天皇の事蹟等とこれらにまつはる大国主命と白鬼の話、海幸、山幸のそれ、日本武尊の武勇、神功皇后説話、一言主大神の出現等の物語りを含んだ同じく一大叙事、抒情詩であり、日と夜、陸と海を視点に置いた壮麗なそれである。

これは記紀共、日本の国家的、政治行政的發達を叙述したものであり、日本皇統の万世一系を特に強調したそれであるから、先述の「魏志倭人伝」のめざした内容のそれらと相異なる側面を有し、両者ともに国家研究に必要不可欠のもので双方共に研究の対象とならなければならない。共存し得るものである。即ち一を以てすべてをおおう体の研究態度はこの点嚴にいましめなければならない。

記紀のヒロイン天照皇大神

ここで古事記、「魏志倭人伝」の両書を勘案しながら日本古代国家の実像を探る。

筆者が前稿にのべた様に、天照皇大神は、もと男神であつたものを豊受大神と共に女神となつた。それは推古朝のときで、この日本嚙矢の女帝をバックアップするものとして颯爽たる万能の女神天照皇大神が登場したのである。天照皇大神の神力をもつてなしたげた種々の事蹟を推古天皇のそれにかぶせるものであつた。その最大の事蹟は出雲王朝の征服併合である。但しここが重大なことであるがこの事蹟はまぎれもない史実であるが、古事記に於ては年代が神武東征と逆にされている。ここが問題である。神武東征の後、この征服併合のことが起るのである。これが逆転されているのは、天照皇大神の神力をいやが上にも強調したい為に、これが神代の高天原での出来事であつたとし、それを推古天皇の権力におおいかぶせたのであつた。

古事記の九州女王国と邪馬台国畿内説の戯言

これにつき後に更にのべるが、なお重大な事は、古事記は史実として「魏志倭人伝」にいう九州のくにぐにの存在を認めていることがあることである。即ち帶方郡から發して狗邪韓国、未盧国、伊都国、奴国、不彌国、投馬国、女王国（邪馬台国）そして更にその南方に国があつた、それらを承認している。これは大きな問題であるがこのことあつて日本の歴史は正に動かしがたい事実を「魏志倭人伝」から学んでいることになる。ただこれがぼやけてしまったのは、これらのくにぐにが、漢字最大級の侮蔑語で命名されていることである。即ち奴、卑、犬畜生等、記紀の成立に

ついでにはさきにふれた（「幻の高安城と記紀の成立」拙稿、大経法大法学紀要三〇号）ので繰り返さないが、この古代日本ナシヨナリズムの書物がこれらの蔑稱を冠した日本のくにぐにを正面から認めるわけにいかなかったのである。これ日本古代研究が混乱する一つの大きな原因であった。故にこれらのくにぐにが普通の呼稱を有していたらナア、とは思はぬでもないが、民族の政權と民衆の關係は千年相変らざるテムペラメントであり、ポリテイであるから、他からとやかく言うべき筋合いのものではない。

この女王国から瓊々杵尊、波限建鵜草葺不合命、五瀬命、神倭伊波禮毘古命（神武天皇）等があらはれる。即ち瓊々杵尊は日向の高千穂の峯に降臨することが古事記神話となっていることは衆知のことであるが、この瓊々杵尊から神武天皇まで北九州にいたことは動かしがたい事実であり、それを古事記は證明している。一つは、高千穂の峯に降臨するという神話はこのことの證明である。そして彼等の出自は日の御子、卑弥呼の君臨していた女王国であった。尚、瓊々杵尊は脊肉韓国の笠沙の御前にいつている。この御前は普通の解釈では海辺であり、彼は海辺のくにで女王国の勢力下にあつた倭の奴国へいったと考えられる。そしてそこで木之花之佐久夜毘賣と会つてこの系統から神武天皇までの子孫が誕生することになるのである。動かしがたい九州女王国論、くにぐに論である。

ここでこの女王国を裴松之が書き入れたという邪馬台国に書きかえてみれば、邪馬台国九州説となり、そうならざるを得ないのである。それ以外には考えられない。大体邪馬台国畿内説を「魏志倭人伝」に従はず主張するならそれはそれで一見識ともなろうけれど邪馬台国をヤマトと考える限り、それは奈良盆地にあつたことは一言半句の説明も證明もいらない。出土品から種々の主張がなされるが、当時でも朝鮮中と日本の通交、交通は盛んで種々の人やものがゆききしていた。それなければ伽耶、任那などの存在が成り立たない。出土品から何かの状況を説明、證明しよう

とならば日本全国を近畿、福岡なみに発掘してから立論しなければならないであろう。一所の発掘、発見で全体をおおう立論を展開するから、それらが相互に抵触してものごとがよく理解出来なくなる。何れにしろ朝鮮中日の当時の関係をロビンソンクルソーや東方見聞録の様な状況で考えてはならないことだけはたしかである。従つて魏帝が銅鏡百枚を卑弥呼に与えてなくてもそれは自由に中国から日本に舶載されていたと考えられる。そもそも何故魏帝が卑弥呼にこれらを与えなければならなかったたのであるうか。生口献上のみかえりか。景初年間の「親魏倭王」を卑弥呼に擬す考えもあるが、そのときの魏帝と卑弥呼の間に如何なる外交的やりとりがあつたのであろうか、無かつたのか。故に邪馬台国畿内説を「魏志倭人伝」に従つて解釈主張することには本来それ自体大変無理がある。まず第一は、これに従うと邪馬台国の北に存在するべきにぐにがヤマトの北方に全くみあたらない。これらのぐにをどこに比定するのか。魏帝が卑弥呼に下賜した銅鏡三角縁神獸鏡百枚が畿内から出土したというが、これにつき疑問をさきにべたが、この鏡も中国製か仿製か、中国職人が日本に渡来して日本でつくつたか不明ということになり、又その出土も畿内に限らない。一番問題はこの鏡が中国から出土していないということになる。

倭姫命、神功皇后等を卑弥呼にあてることも無理がある。倭姫命が卑弥呼の行つた様な政治活動を展開したとも考えられない。彼女は天照大神の斎宮であるから卑弥呼を日ノ御子と考えた場合は話がコンガラがる。神功皇后にしても同じことが云える。彼女は筑紫にいたのでその点倭姫とは状況が異なるけれど、配偶がいた（仲哀天皇）ことや赤子がいたこと、新羅征服譚等卑弥呼とそぐわない。何れにしてもこういった思いつきの様なことが堂々と立論としてべられている様なことはどういふことなのであろうか。これらから邪馬台国畿内説は邪馬台国をヤマトと讀むだけの根據しかない如くである。

神武東征と出雲国征服

神武東征を史実として否定することは出来ないが、その物語り、神武天皇と五瀬命が、相談して女王国・日向から東征に上り、中国地方を経て浪速に至り、そこから船で当時の河内湾（東大阪市）孔金衛坂にのりつけて当時同地方を支配していた長髓彦と戦端を交えた、とあるがこのとき神武天皇らは東征の途次、筑紫の岡田宮に一年、阿岐国の多祁理宮に七年、吉備の高島宮に八年とどまつた、と云う。これは記録や資料はないが、中国、四国のくにぐにとの戦闘や外交交渉を意味する年月なのであろうか。

長髓彦は強力でまたやまと諸民一致して侵畧軍と戦ったので、神武軍は敗退し、皇兄五瀬命はこのとき重傷を受けて陣没する。神武軍は方向を変え和歌山から木の国を経て再び長髓彦軍と戦って最後にこれを亡ぼす。これが物語りというのであるが、このときここに饒速日命集団ニギハヤヒが長髓彦軍と共にあつて神武軍と戦っている。この饒速日集団は何ものかが問題となるがこれは出雲族と同様の渡来民団であつたと考えるのが最も妥当である。即ち出雲族も日本海をへだてて東アジア大陸と密接に関係していたとみられるし、先述の如く中朝韓日の日本海交通は古来頗るさかんで当時出雲族は東アジアからの強い影響下にあつたことは疑いない。ただこれは亡国の民となるので伽羅国から人々が九州に渡つて邪馬台国をたてたという様な説が出て来ないのである。その人々の先端が饒速日民団でそれが現生駒の石切神社周辺に長髓彦と義兄弟（妹の三炊屋媛と婚）として住んでいたのである。これがそういった関係の人々であつたという證據としては次の記録がある。

船の長フネオサ 跡部首らの祖オビト、天津羽原

説

梶取カシリ阿刀造の祖、大麻良アリのマヤツ舟子カボ倭鍛師の祖、天津麻浦ヤマトカネ笠縫の祖、天津眞良カサズメ

曾々笠縫の祖、天津赤点良

為奈部の祖、天津赤星

論

即ちこれら人々の性格、氏族、機能が右の如く記録されてこの饒速日民団が出雲族の特長、航海、造船、金属技術関係の機能を有した集団でその系列に属するものであったことがこれら記録から理解されるというのである（長髓彦）の実像、進藤治、幻想社、一九八九）。

こうして神武軍は再び長髓、饒速日連合軍と対するのであるが、どういう手段が講じられたのか、長髓彦はこの再度の戦いで破れ、敗死するのである。この勇猛の長髓彦が敗死するのは、この饒速日集団が神武軍と抱合してしまつて長髓彦が孤立する結果であつた。これについては種々の説話があるが長髓彦は、饒速日命と三炊屋媛との間に誕生した男子（可美真手命ウマシマテ）に自ら大酋長の長剣を与え、それに身をつらぬいて死んだ、という（いしきり、木積一仁、六月社書房、昭和四十八年）。こうして神武軍は畿内平定の最初の難関を通過したのであつた。

和、倭国、大和朝廷

勝誇つた神武軍は最大の隣国出雲王国へ殺到する。神武軍は最后出雲王国を覆滅併合するが、その血戦の記録はない。何人も何ものもこの戦いの状況を語らない。ただ古事記をひもとけば、そこに簡単な記述がある。高天原から建タチ

策であつた。即ち征服の後、これら被征服民をとりこみ、征服民との融合をはからつて己がおさめた勝利を甘美な雰囲気の中で安定さそうというねらいをもつたものである。成功すれば狡猾で独善的なそれとなる。これは後に仏教受容戦争後の国家政策として執行される聖徳太子の和の精神、一七条憲法の正にその先蹤となるものであつた。日本ではこういった国家的弱さ、依頼性、狡猾性が一つの特長をなしている。自由、平等、独立、友愛からはへだたつてゐる。出雲王国の大国主命は古事記のいう百八十神^{ももひち}をわが子供^{こども}と呼ぶ如くそのうからやからは数多く、彼自身、出雲地方では創造神であり、宗教的祭祀の祭司でもとよりシャーマンの呪術的要素をそなえていた。出雲神話によれば風土記の神台帳に三九九の神社がのつてゐるという（出雲風土記、有朋堂、出雲神話、有精堂、昭和五一年）。かかる対象に対して大和朝廷がとつた政策はまづ次の如きが考えられた。

一、大国主命のシャーマン性、呪術性を考えて、壮大な天をも摩する殿堂が命^{みこと}のすみかとして建立された。即ち現在の出雲大社で、その巨大さは、往昔、その高さは四八米にも及んだことがあつた（一二世紀平安神社殿、一九九九年九月からの出雲大社境内の発掘、毎日新聞）という（ちなみに奈良の大仏殿は高さ四五米）。この建造は、勿論大国主命の神々^{ミコト}と命を信仰する人々を融和するためであつた。

一、大和朝廷は被征服民の神々をことごとく女王国のそれらと同一系統に置いた。彼等の間の関係は異質ではなく平等であるというもので、ましてや争闘の關係はならん存在しないことを主張した。即ち大国主命の近い先祖は素戔鳴尊で、天照大神の弟、今一人の姉神は月讀命である。スサノオノミコトについては出雲神話ではその出自は出雲国須佐の郷であるとなつてゐるが姫路の広峯神社（主祭神は素戔鳴尊）周辺では興味ある話があつた。それは、スサノオノミコトの出身はイランのスサで、その男性というのでスサノオという。この神は疱瘡（天然痘）の神で、京都

に疫病が流行し痘瘡の為に住民が殆んど死滅する大災厄に見舞われたので、京都から広峯神社に乞うてスサノオノ命を勧説し、これを京都八坂の祇園神社にまつた。為に京都の疫病はおさまり、この神は方々で祀られる様になり、福岡の祇園社も有名である、というものである。大和朝廷の素盞鳴神信仰伝播の成功であろう。また饒速日命についてもこの神を天忍穗耳命の子であるということに序列している。つまり天忍穗耳命は瓊々杵尊の父神で、本来この神が天孫降臨する筈だった、という。故に饒速日命は瓊々杵尊の兄弟ということになるのである。但し神系列表にはこの神は天火明命（あめのひあきのみこと）としてのせられてゐる。そしてこの饒速日命は高天原から降臨し、天磐船（あめのいわふね）に乗って河内国の河上の哮ヶ峰（たけの）におりたつたという。そして鳥見の白庭山（しろにわやま）にうつた、とあり、現石切神社の上宮にまつられている。大和朝廷は和の精神の為に神々をつくり、それを自らの神列譜の中にくみ入れて天神同様尊んだのであった。

一、大和朝廷はその他こういった被征服民の神々をすぐれた魅力的な人格に描いている。一番顕著なのは、大国主命の白兔伝説であり、また素盞鳴命の八岐大蛇退治説話等であろう。これは今日、日本の人口に膾炙（たいわ）していて知らぬものはない。これも大和朝廷の大和政策成功の余韻であろう。

記紀と魏志倭人伝の総括

一九四五年以来、記紀は日本人の眼から消え、この希有の超一級古代史は弊履の如く屑籠へ投入られた。そして日本古代史については魏志倭人伝が正確無比であるとされ、これ一本やりですすむこととなり、何から何までの古代現象をこれで理解し、描写しようとした。どだい無理である。次のことを提唱する。

一、古事記は日本古代史の国家政治的側面を記述し、「魏志倭人伝」はその社会経済的のそれを記述している。両

説

者併存し、相補つて日本古代史研究の超一級の糧とすべきである。

一、両書、女王国以下の北九州くにぐにの存在を認めている。八世紀の古事記が三世紀の「魏志倭人伝」を参考にするとところがあったのか、両書、眞実を眞実として独自の結論に到達して女王国以下を承認したのか。何れにしても大変興味深い。これで邪馬台国論争は雲散霧消する。

ちなみに、古事記には鉄劍（青銅劍ではないと思はれる）の描写が多い。建御雷神が、十拳劍じっけんを抜きて、波の穂に逆さかしまに刺立て、その上にあぐらをかいて大国主命にといただす、とか、建建争いで「劍刃つるぎに取成しつ」といった言葉があらはれる、とかがある。圧巻は、衆知の草薙劍が八岐大蛇の尾から出た話である。また長隨彦の戦いで描写される長劍の話もある。鉄劍の出現は弥生時代（前四世紀頃から紀元三世紀ごろまで。普通前、中、後の三段階にわけられる）中後期からといはれるが、神武軍の河内勢や出雲族との戦いは鉄劍普及度から何時頃に想定出来るのであろうか。日本では埼玉稲荷山古墳から雄略天皇（ワカタケル大王）と推定される人名を含む一一五文字の金象嵌を施した鉄劍が出土している。これは大体四百六、七〇年であろうか。考えてみれば年代きりこみに手掛かりらしきものは無いことは無い如くである（所謂弥生時代、中国では鉄劍が大いに用いられていた、という）。

三、内陸国家と海洋国家

右に日本古代国家に関する現在の愚見をのべた。最後に均田法と班田收授法をつくりあげたすぐれて民衆的共産的國家の發展につき考えてみたい。前者はさきにもふれたが、五世紀後半北魏の孝文帝が創始、北朝の諸王朝に継受さ

れ、隋、唐にいたって口分田、永業田の支給とその代償としての租、庸、調、府兵などの課役を規定したものの。八世紀後半に崩壊。班田收授法については先にのべた如くである。これら極めて民衆的国家をたて実行した中日の国家体制がしゅん時に何故崩壊していったのか、の問題である。

これらをとりあげて世界史的視野で問題を取扱うのは、あまりに広汎で、茫乎馮河（とりとめない）のそしりをまぬがれまい。これらの実は稿を新におこして考える。従つてその視点に關しここでは愚見を簡條的にのべるにとどめたい。

一、国家論の大前提は次の如し。国家が世界的に發展する条件は、戦争、革命による進運である。国家は一人もしくは少数者が支配し（本文に示した）、戦争、革命によつてのみ發展する。すべての国家は有史以来、いな以前でもこの運命に従つた。

一、このうち革命にしろ戦争にしろ、内陸的（大陸内）發展をこころみたものと海洋的なそれを庶幾したものがある。前者をA、後者をBとする。

（一）Aには、最も顕著なものとして、アレキサンダー大王、中国諸王朝、欧州諸王朝、ナポレオン一世、三世、ビスマルク、オーストリア、ヒットラー、ムッソリーニ、スターリン、明治日本（大正、昭和を含む）等がある。これらは一旦、戦争によつて或程度大きな發展をとげるがその隆盛の期間はとおおむね短い。

（二）Bには、スペイン、ポルトガル、オランダ、英国が属し、その隆盛の期間は比較的永い。

（三）民衆的、民主的發展をはかつたもの、均田法、班田收授法の国、英国革命、アメリカ革命、フランス革命、共

説

産主義革命の国々。

即ちここに概畧、国家の三分類を示したが、この三要素を国家の歴史、そこからの発展の見とおしに当はめることが出来、そしてここからそれら国家の将来の発展の予測をたてることが可能となる。

論

例えばテーマである、均田法、班田収授法の国は、(三)の要素をみたしたが、(一)、(二)、を欠いてその命運は短期であつた。ナポレオン一世、ヒットラー、ムッソリーニは、(一)の要素で極めて精力的、強力にみたしたが、(二)、(三)の要素を欠いて没落した。これらの最も典型的な例である。スペイン、ポルトガル、オランダは、(二)の要素をもつて一時世界に覇をとなえるが、(三)の要素を欠いて国家の命運龍頭蛇尾となる。英国は(三)の要素を最も広汎、強力に展開して七つの海を支配し、永く繁栄を謳歌するが、(一)の要素を欠き、また(三)の要素も未だしで、国家的発展としては矢張り龍頭蛇尾のそしりをまぬがれない。(一)、(二)、(三)の要素を備えた国家はフランスであり、(一)、(二)、(三)の要素すべてをそなえた国家は米合衆国である。特に米国は太平洋、大西洋の両海洋にまたがるアメリカ革命の国として最も強力に発展し、国家的展望の予測は最も強力である。

ここに筆者は国家発展の三要素を鋭快して示したが、もとよりこれらは一つの骨組的要素にすぎず、大畧のことであり、言はば、筆者今後の研究のよすがを示したものに他ならない。

参 考 文 献

- The Life of St. Francis Xavier, ed. By Alan Roper; textual editor, V. A. Dearing, Univ. of California, 1979.
Jesuit and Fair in the Spanish Expansion to the East, J. S. Cummins, Variorum, 1986.

Francis Xavier, His Life, His Times, Vol. I of IV Vols, Europe, 1506-1541, trans. by M.J. Costelloe, S.J. Creighton Univ., The Jesuit Historical Institute, 1973.

The Works of John Dryden, Vol. XIX, Prose, The Life of St. Francis Xavier of The Society of Jesus, Apostle of the Indies, and of Japan. originally written in French by Father Dominic Bohours, trans. by Mr. Dryden, 1688, Univ. of California, 1979.

The Autobiography of St. Ignatius Loyola with selected Documents, trans. by J.F. O'Callaghan, Fordham Univ. Press, 1992.

Nationalism, Liberalism, and Progress, vol. I, Ernst B. Haas, Cornell Univ. Press, 1997.

The Age of Nationalism, Hans Kohn, Harper & Brothers, 1962.

The Idea of Nationalism, Hans Kohn, the Macmillan Company, 1961.

The Mind of Germany, Hans Kohn, Charles Scribner's sons, 1960.

American Nationalism, Hans Kohn, Macmillan Company, 1957.

Prof. Hans Kohn was once our teacher, my wife and me, in the Univ. of Pennsylvania, in 1962, being lectured, discussing political problems and talking about Japan face to face.

Marx, Engels Basic Writings on Politics and Philosophy, ed. By L. S. Feuer, Doubleday, 1959.

Marx, Engels, Selected Works, two vols, Foreign Languages Publishing House, Moscow, 1951.

Karl Marx and Friedrich Engels, The Communist Manifest, with an Introduction by A.J.P. Taylor, Penguin Classics, 23rd ed. 1988.

A History of Russia, Basil Dmytryshyn, Prentice-Hall Inc., 1977.

Stalin, as Revolutionary, 1879-1929, R. C. Tucker, W. W. Norton, 1973.

The Stalin Revolution, foundations of Soviet totalitarianism, ed. by R. V. Daniels, D. C. Heath & company, 1972.

The Time of Stalin, portrait of a tyranny, A. Antonov-Ovseyenko, Harper C. Books, 1981.

The History of Korea, by Han Woo-Keun, trans. by Lee Kyung-shik, ed. by Grafton K. Mintz, the Eul-yoo Publishing Company, 1970.

朝鮮史、旗田巍、岩波全書、一九六七年、第一六刷。

聖フランシスコ・ザビエル全書卷（全四卷）、東洋文庫、一九九四年。

ザヴィエル、吉田小五郎、吉川弘文館、昭和六十三年。

ザヴィエルと日本、岩野久、吉川弘文館、平成十年。

鎖国・上・和辻哲郎・岩波文庫、同下・岩波文庫。

日本共産党の六十五年・日本共産党中央委員会・一九八八年。

古事記、日本書紀、聖書。聖書の謎・死海文書・講談社、一九九九年。

The Koran, Everyman's Library, コーラン（上）（中）（下）・岩波文庫。

日本仏教史・第一卷・辻善之助・岩波書店・昭和四十四年。

キリシタン書・排耶書・岩波書店・一九七〇年。

日本歴史・古代2・岩波講座・一九六七年。

日本歴史1・2・古代・東京大学出版会・一九八九年。

日本原始共産体の研究・細川亀市・白揚社・昭和六年。

「日本原始共産制社会と国家の形式」歴史科学協議会編・校倉書房・一九七二。

日本農民史・河西省五・古今書院・昭和五年。

日本古代の耕地と農民・森田悌・昭和六一年。

神代史の研究・津田左右吉・岩波書店・昭和一三年。

日本上代史研究・津田左右吉・岩波書店・昭和五年。

日本上代史の研究・池内宏・中央公論・昭和四五年。

日本古代国家の研究・井上光貞・岩波書店・昭和五〇年。

日本古代国家論・第一部・石母田正・岩波書店・昭和四八年。

日本古代国家論・第二部・石母田正・昭和四九年。

日本の古代文化・林屋辰三郎・岩波書店・一九七一年。

日本古代文化・和辻哲郎・岩波書店・昭和四〇年。

任那と日本・金廷鶴・小学館・一九七七年。

伽耶国と倭地・尹錫暁著・兼川晋訳・新泉社・一九九三年。

歴史公論4・ナゾの四世紀・雄山閣・昭和五七年。

中国からみた邪馬台国と倭政権・王巍・鳩山閣・一九九三年。

歴史人物(邪馬台国畿内説を検討する)・中央公論・昭和五七年。

歴代天皇紀・歴史と旅・昭和五七年。

石切さん・神道石切教本庁・昭和五五年。

いしきり・木積一仁・六月社書房・昭和四八年。

「長髓彦」の実像・幻想社・一九八九年。

出雲神話・有精堂・昭和五一年。

出雲の古代史・門脇禎二・NHKブックス・昭和五一年。

この稿の成るに当たって、明治学院大学、慶應義塾大学、国際日本文化センター各位より貴重なる文献の借覧を許された。ここに誌して厚く感謝の意を表したい。

